

箱崎 56

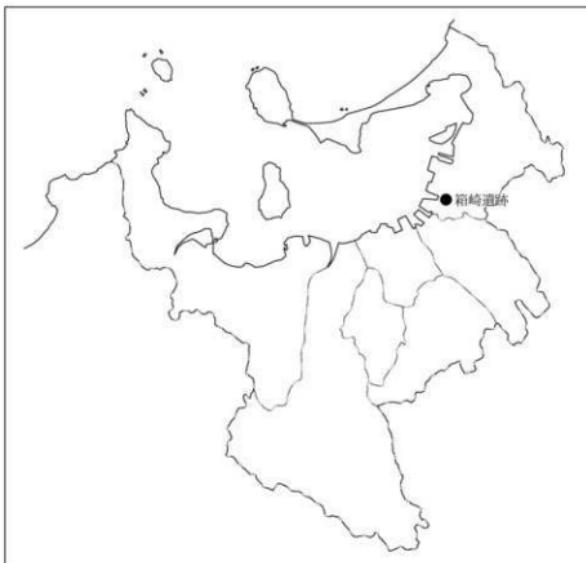
— 箱崎遺跡第 78 次調査報告 —

2018

福岡市教育委員会

箱崎 56

— 箱崎遺跡第 78 次調査報告 —



遺跡略号 HKZ-78

調査番号 1538

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展した歴史をもち、地中にはそれらを物語る文化財が多く点在しています。本市ではこれら文化財の保護に努めているところではありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、事前に発掘調査を実施して記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は、共同住宅建設に伴い、東区箱崎1丁目で実施した箱崎遺跡の第78次調査の報告です。箱崎遺跡は宮崎宮周辺に栄えた古代から中世を中心とする遺跡で、特に中世においては都市的な発展を遂げたことが明らかになっています。今回の調査では当該機の遺構・遺物を多く検出した他、それに遡る古墳時代の遺構も確認しており、本遺跡の全体像を推察するための多くの手がかりを得ることができました。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご理解とご協力をいただきました株式会社クレ・コーポレーション様をはじめとした関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成28年1月25日から平成28年5月24日まで東区箱崎1丁目で実施した箱崎遺跡第78次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSDとそれぞれ記号化し、すべての遺構を01から通して番号を付した。柱穴は、調査区の任意のグリッドを1つの単位とし、グリッドごとに01から通し番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土地理院（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した遺構実測図は早田有輝子、中尾祐太による。
5. 本書に掲載した遺物実測図は大庭友子、米倉法子、中尾による。
6. 本書に掲載した遺構写真撮影、遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾による。
7. 本書に掲載する遺物の分類に関しては、主に以下の文献を参照した。

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世当時学会 10年記念

楠瀬慶太 2007『土師器食膳具からみた中世博多の土器様相 - 博多遺跡群の土師器編年 -』

『九州考古学』82 九州考古学会

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊XV - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集

山本信夫 1990「統計上の土器 - 歴史時代土師器の編年研究によせて - 」『九州上代文化論集』

乙益重隆先生古希記念論集刊行会

8. 本書にかかる記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1538	遺跡略号	HKZ-78
調査地	東区箱崎1丁目2032-2	分布地図図幅名	034
申請面積	409.91m ²	開発面積	250m ²
調査実施面積	270m ²	事前審査番号	27-2-346
調査期間	平成28年1月25日～平成28年5月24日		

本文目次

Iはじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2
II調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	6
(1) 1面上整地層(道路状遺構)の調査	6
(2) 1面・2面の調査	6
井戸 溝 土坑 遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物	
(3) 3面の調査	32
土坑 包含層・遺構検出時・ピット出土遺物	
(4) その他の出土遺物	35
石製品 金属器 撤乱出土遺物	
III小結	38

挿図目次

Fig1 周辺遺跡分布図(1/50,000)	3
Fig2 箱崎遺跡各調査地点位置図(1/5,000)	4
Fig3 第78次調査地点位置図(1/1,000)	5
Fig4 1面上整地層平面図および1面遺構配置図(1/200)	6
Fig5 2面遺構配置図および3面遺構配置図(1/200)	7
Fig6 調査区基本層序(1/40)	8
Fig7 SEO1 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	10
Fig8 SE26 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	11
Fig9 SE65 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	12
Fig10 SD28・43・49 実測図(1/40) およびSD49 出土遺物実測図(1/3)	13
Fig11 SK03・04・05・06 実測図(1/40) およびSK05・06 出土遺物実測図(1/3)	14
Fig12 SK09・10 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	15
Fig13 SK12・14・15 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	16
Fig14 SK16・19・27 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	17
Fig15 SK29 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	18
Fig16 SK31・32・33 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	19
Fig17 SK34 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	20
Fig18 SK36・38・39・40 実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)	21

Fig19	SK41・43・44 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig20	SK50 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig21	SK51 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	24
Fig22	SK52・53 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig23	SK54・56 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	26
Fig24	SK59 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig25	SK61 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	28
Fig26	SK62 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	29
Fig27	SK63 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	30
Fig28	1面および2面遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物実測図 (1/3)	31
Fig29	SK22・23 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	32
Fig30	SK24・25 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	33
Fig31	SK46・48・64 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	34
Fig32	3面遺構覆土・遺構検出時・ピット出土遺物実測図 (1/3)	35
Fig33	出土石製品・金属製品実測図 (1/3) および銅錢 X線写真・拓本 (縮尺任意)	36
Fig34	擾乱出土遺物 (1/3)	37
Fig35	土師器集積遺構配置図 (1/300)	39
Fig36	畿内系土器の分布 (1/10,000)	39

図版目次

- PL1 1 調査第1区1面全景（南東から） 2 調査第1区2面全景（南東から）
 3 調査第1区3面全景（南東から）
- PL2 1 調査第2区2面全景（北西から） 2 調査第2区3面全景（北西から）
 3 調査第3区2面全景（北西から） 4 調査第3区3面全景（北西から）
- PL3 1 1面上整地層検出時（西から） 2 SD02（道路側溝）（西から）
 3 SK03・04 土層断面（南東から） 4 SK31 遺物出土状況（北から）
 5 SK33 遺物出土状況（北東から） 6 SK50 遺物出土状況（南から）
 7 SE65 完掘状況（南西から） 8 SK64 遺物出土状況（北東から）
- PL4 1 SK10 出土遺物 (47) 2 SK10 出土遺物 (65)
 3 SK14 出土遺物 (71) 4 SK32 出土遺物 (111)
 5 SK22 出土遺物 (318) 6 SK24 出土遺物 (324)
 7 SK64 出土遺物 (332) 8 摆乱出土遺物 (372)

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市東区箱崎 1 丁目 2032-2 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 27 年 7 月 7 日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財審査課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから確認調査を実施し、現地表面下 30cm で遺構が確認されたため、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、予定建築物の建物範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 28 年 1 月 13 日付で株式会社クレ・コーポレーションを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 6 月 13 日から発掘調査を、翌平成 29 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社クレ・コーポレーション

調査主体：福岡市教育委員会

発掘調査：平成 28 年度・資料整理：平成 29 年度

調査総括：文化財部埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 課長 常松 幹雄

同調査第 2 係長 榎本 義嗣（27 年度）

加藤 隆也（28 年度）

大塚 紀宜（29 年度）

調査庶務：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）管理係 係長 大塚 紀宜（27 年度・28 年度）

同係 横田 忍（27 年度・28 年度）

文化財保護課 課長 宮崎 誠二（29 年度）

管理調整係係長 藤 克己（29 年度）

同係 松原加奈枝（29 年度）

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係 事前審査係長 佐藤 一郎（27 年度・28 年度）

本田浩二郎（29 年度）

同係主任文化財主事 池田 祐司

同係文化財主事 板倉 有大（27 年度）

同係文化財主事 清金 良太（28 年度・29 年度）

調査担当：埋蔵文化財課調査第 2 係 文化財主事 中尾 祐太

発掘作業：唐島栄子、桑原美津子、村山巳代子、中村桂子、柴野孝子、安東昌信、上野照明、

鶴崎哲夫、遠竹卓馬、山田輝人、柳山恵子、阿部洪太郎、熊埜御堂早和子（山口大学学生）、

早田有輝子（福岡女子大学学生）

整理作業：松尾真澄、木本恵利子

3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の北を限る博多湾沿岸には、箱崎砂層と呼称される新砂丘砂層が堆積している。本砂丘は東区箱崎から室見川河口付近までのびており、形成時期は自然科学的におそくとも縄文時代晚期までと考えられている。砂丘は鞍部や旧河川などに分断されつつ微高地を形成しており、微高地上には、複数の遺跡が点在している。箱崎遺跡もこの砂丘上に形成された遺跡のひとつである。遺跡は東区箱崎～馬出にかけての南北1000m以上、東西約500mの範囲に展開する。遺跡周辺の地形は現在と比較して、地形が大きく異なっており、現在の宇美川の河口付近まで入り江が大きく湾入していたと推定されている。これにより遺跡周辺は半島状の地形をなしていたと考えられているが、この旧地形は箱崎遺跡の出現、発展に大きく寄与したものと推定される。

Fig2は、これまでに実施された発掘調査および確認調査で明らかになった砂丘面のレベルから等高線を推定したもので、2003年以降使用されていた図をもとに、近年の調査結果を反映させたものである。詳細はこれまでの報告にゆずり、近年の発掘調査および確認調査の結果明らかになった部分を中心に概説する。遺跡の東側は現在のJR鹿児島本沿い付近に推定されており、西側については25次調査地点・32次調査地点の西側に設定されている標高2mのラインがこのまま南西にむかってのびると推定してきた。しかし、近年の発掘調査および周辺の確認調査の結果から上記推定とは大きく異なる地形であったことが明らかになった。遺跡中央部西寄りに位置する67次調査では、調査地点における砂丘検出レベルの比高差が調査区高所の北側と低所の南側で約1mあることが分かり、報告者は調査地点の南側には谷部が存在していたことを指摘している。この結果を巨視的にみるとさらに興味深いことが分かる。67次調査地点の南側では複数地点で確認調査を実施しているが、一帯においては中世にさかのぼる遺構がまったく確認されない範囲があり、さらにその範囲内においては、検出される砂層が、基盤層であるいわゆる砂丘とは異なり、滯水したものや粗砂層となる部分がある。それは現在までの確認調査の結果から箱崎小学校付近から宮崎宮北西部にかけて帶状にのびることが予想される。つまり、67次調査地点を含む上記の範囲には、一定の規模の鞍部（鞍部2）が存在していたということができる。この鞍部は従来指摘してきた宮崎宮南東部のもの（鞍部1）とは異なり、単に低地であるだけでなく、上記の堆積層から、絶えず水の流れがあったものと考えられる。この新たに明らかになった地形も遺跡を考えるうえで極めて重要な要素となるだろう。

本遺跡における本格的な集落の形成期は古墳時代で、丘陵東側の緩斜面に位置する調査地点で該期の住居や埴輪が確認されている。8次調査では土坑から飯蛸壺が一括で出土している他、住居からも一定の飯蛸壺が出土しており、当時の湾岸集落の生業を考えるための興味深い成果が得られている。その後、奈良時代になると集落は断絶し、再び生活遺構が確認されるのは10世紀代で、以降中世を通して発展する。遺跡範囲内に所在する宮崎宮の創建が延長元年（923年）と時期的に符合することから、生活域の出現と発展には同宮が深く関係していると考えられる。

10世紀～11世紀前半にかけての遺構は宮崎宮の南東側に集中する。10世紀前半は、遺物とわずかな遺構を中心となるが、10世紀後半になると生活遺構である井戸が検出されるようになり、11世紀前半にかけて同地点で遺構が増加する。出土遺物にはイスラム陶器や石帯巡方、越州窯系青磁碗などがあり、一般の集落とは異なる様相がうかがえる。また、上記の遺物が出土する範囲と重複するかたちで瓦がある程度まとめて出土している。瓦は二次的に利用することも可能で、時期を特定するのは困難であるが、出土した瓦のなかには大宰府系、鴻臚館系の瓦が混入しており、当初の遺跡の性

格を考えるひとつの有用な遺物であるといえよう。黒色土器をはじめとして当該期の遺物は本調査地点でも多量に出土している。

以降、砂丘の発達も与し、生活遺構の範囲は徐々に拡大していく。11世紀後半～12世紀前半には、上記の生活域は継続しつつ、遺跡東側緩斜面を中心として遺構が検出される範囲が拡大するとされている。この時期前後の博多湾沿岸では、湧軸館衰退に伴い博多遺跡群が貿易の中心地になることが既往の調査・研究で明らかになっている。この影響は箱崎遺跡にも表れており、この時期以降急増する井戸には中国商人や貿易との関係が考えられる桶を積極的に使用するようになる。また、墨書き白磁を含む白磁も一定数出土しており、都市化の契機には上記の貿易体制の変革が深く関係しているものと想定される。その他の遺物としては、この時期前後の高麗青磁がまとまって出土する他、楠葉型瓦器碗に代表される畿内系土器も集中して出土することが明らかになっている。注目すべきは、これらの遺物の出土傾向がそれぞれ異なることである。上記の鞍部2以北では墨書き陶磁器が集中し、楠葉型瓦器碗は筥崎宮の北側に集中する。楠葉型瓦器碗は筥崎宮北側に近接する本調査地点でも複数出土しているが、その量は既往の調査地点の中で最も多い。今後の調査の進展により、こうした遺物の分布傾向から構成集団の差を明らかにできる可能性もあるだろう。

12世紀中頃～13世紀は遺跡のひとつのピークで前代までの生活域は踏襲しつつ、遺跡内のほぼ全域で遺構が確認されるようになる。生活遺構を代表し、調査において最も多く検出漏洩が少ないと考えられる井戸をみると、極めて近い場所に同時期もしくは近い時期のものが複数基重複している例もあり、人口の集中および生活域の継続性をうかがうことができる。この他、遺跡の北側に位置する10次調査地点や38次調査地点では、鋳型や羽口、ガラス坩埚などの生産関連遺物が出土しており、以上の傾向を総合的にみれば、該期の遺跡は都市としての性格を付与できるだろう。本調査区の該期における井戸は周辺と比較すると少なく、土師器の集積遺構が多く確認された。上述した楠葉型瓦器碗の検出も考慮すると通常の集落とは異なる性格をもっていた可能性がある。なお、生産関連遺物は本調査地点でも検出されている。

13世紀後半以降も遺跡内の全域に遺構が認められるが、特に遺跡西側緩斜面をより積極的に使用するようになることが明らかになっている。しかしながら、該期に中心となる遺跡西側は調査が進んでおらず、かつ狭隘な調査区が多いため、未だ不明な点が多い。



Fig1 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

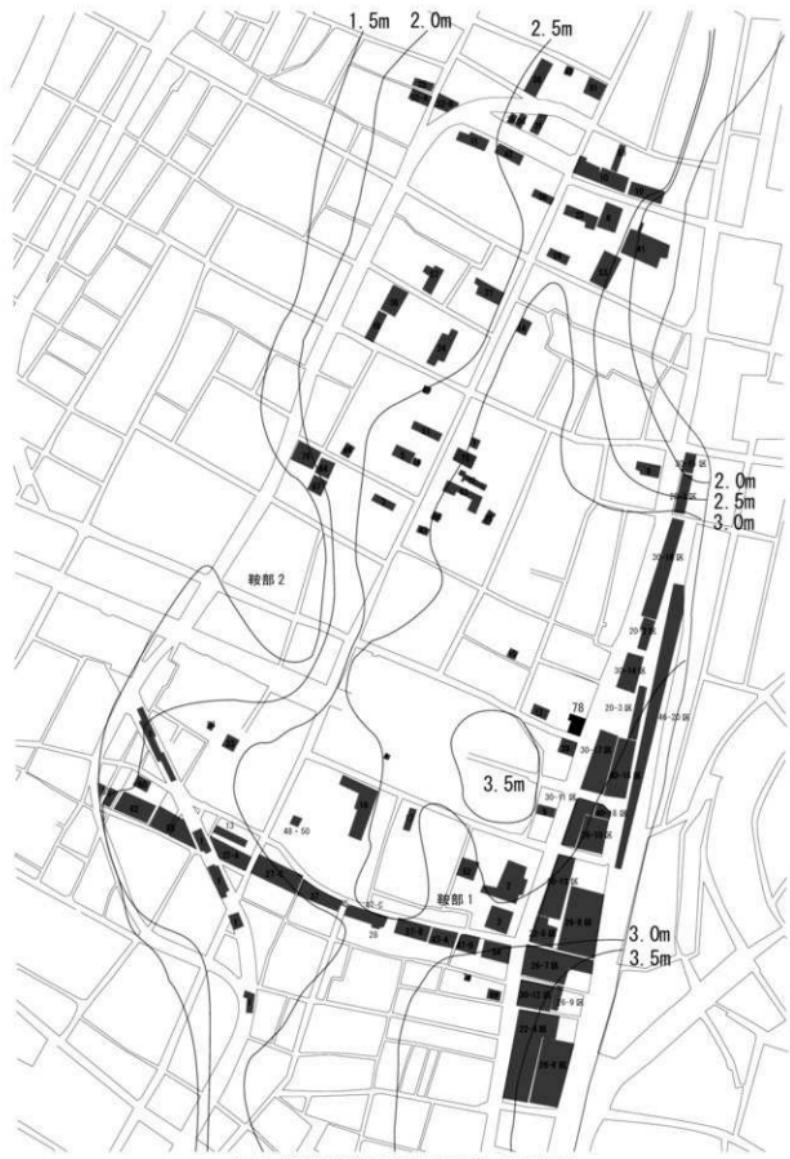


Fig2 箱崎遺跡各調査地点位置図 (1/5,000)

II 調査の記録

1. 調査の概要

78次調査地点は箱崎遺跡の南東部、砂丘東側緩斜面の安定した高所に位置する。周辺では複数次の調査が実施されており、西側には12次調査地点が、南側には38次調査地点が所在する。

本調査は敷地面積409.91m²のうち共同住宅建設に伴う土留めの範囲内で行った。調査面積は270m²である。

基本層序はFig6に示すとおり、基本的に表土直下で遺構面となるが、遺構面の残存状況は場所によって異なる。調査区の北側では表土下約50cm、標高約3.5m前後の高さで暗褐色砂質土層を確認。この面に掘り込みが認められたので、これを第1面として設定。土坑や井戸を検出した。第2面はこの下約20cm、標高3.3m前後の面に設定。本調査で検出した主要遺構のほとんどはこの面で確認している。その下20~30cm程度で基盤層の黄色砂となり、この面を第3面に設定した。3面では古墳時代の遺構を検出している。調査は基本的にこの3面で実施したが、調査区の北西側の一部では1面の上層に良好な状態で硬化面が残存していたため、この面から調査を実施した(Fig4)。この面は土層観察などから道路ということが明らかになった(Fig6 土層1~3)。

調査に先立ち、1月21日、22日に事業主協力のもと遺構面までの表土の鏝取り、および搬出を実施し、翌週1月25日に機材搬入と同時に調査開始。一定量の表土搬出を行ったが、確認調査から想定される堆土量を考慮し、調査区を3分割して調査を実施した。調査第1区は調査区の北西部。上記の道路状遺構から順次調査を行い3月13日に1区の調査を終了。翌14日に表土の反転を行い、調査区北東部(調査第2区)の調査開始。調査区北東部は1面の残存状況は悪く、ほとんどが2面以下の調査になった。第2区の調査は4月10日に終了し、調査区反転作業を4月11日、12日に行い、残る南側(第3区)の調査に着手。第3区に関しては1区・2区の1面に対応する面が残存しておらず、2面以下の調査となった。3区の調査は5月17日に終了し、翌日以降、埋戻し、撤収作業等を行い5月24日に調査にかかる全ての業務を終了した。



Fig3 第78次調査地点位置図 (1/1,000)

2. 遺構と遺物

(1) 1面上整地層（道路状遺構）の調査 (Fig4)

調査区北西側の一部で検出した。表土鋤取りの際に表土直下に硬化面があることを確認し、部分的に調査を実施した。Fig6の土層1・2・3から整地層であることが分かり、掘り下げの結果、硬化面の検出範囲と平行し、かつ一部重複するかたちで溝が検出されたため道路と判断した。遺跡内で初めての道路状遺構である。時期比定に耐えうる量の遺物は出土せず、詳細は不明であるが、後述する近世の井戸 SEO1との関係から近世以降の道路と考えられる。

(2) 1面・2面の調査

調査区北西側で検出した道路直下と、北東側の一部は周囲より浅く遺構面が検出されたため、これを便宜的に1面とし、2面はその下に設定した。1面は堆積層（包含層）と遺構の覆土が極めて酷似しており、実際は1面で検出できなかったものを2面で検出・調査した遺構も多いと考えられる。両面で検出した遺構に顕著な時期差は認められず、各遺構間では若干の時期さは認められるものの、それを層別に明確に分けることはできない。したがって、ここでは各面で調査した遺構を番号順にまとめて報告する。

1面上整地層

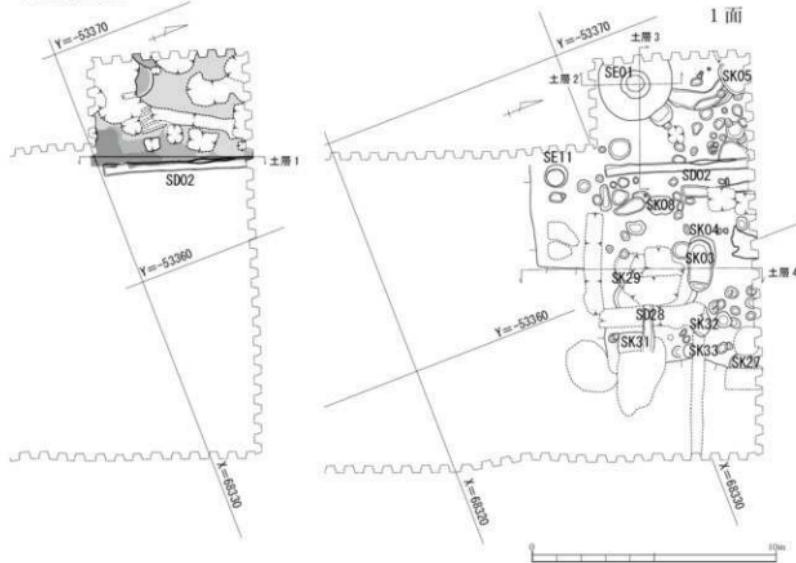


Fig4 1面上整地層平面図および1面遺構配置図 (1/200)

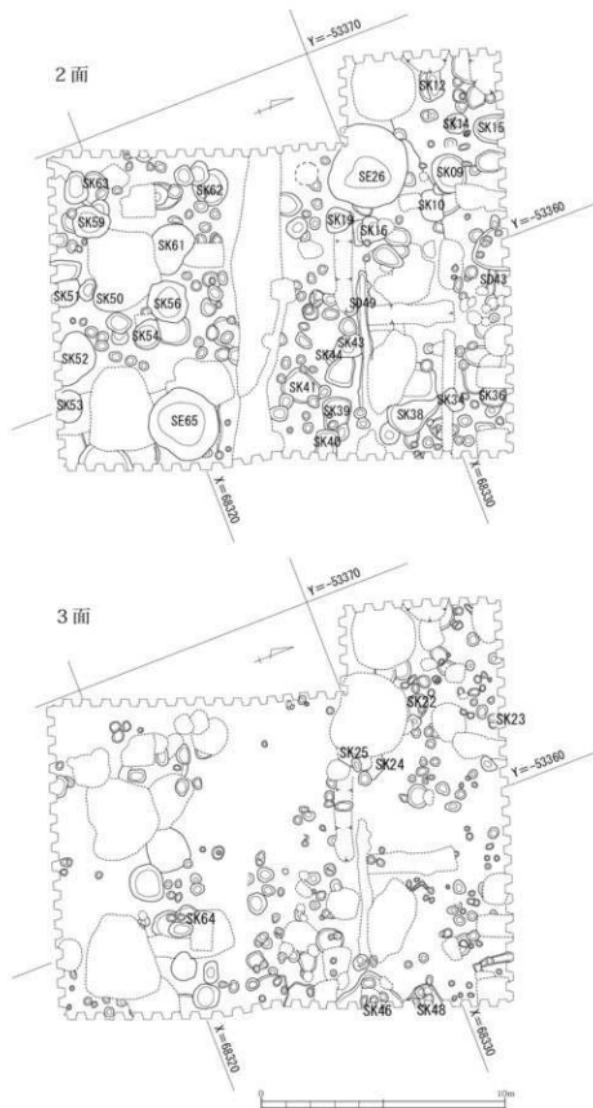


Fig5 2面遺構配置図および3面遺構配置図 (1/200)

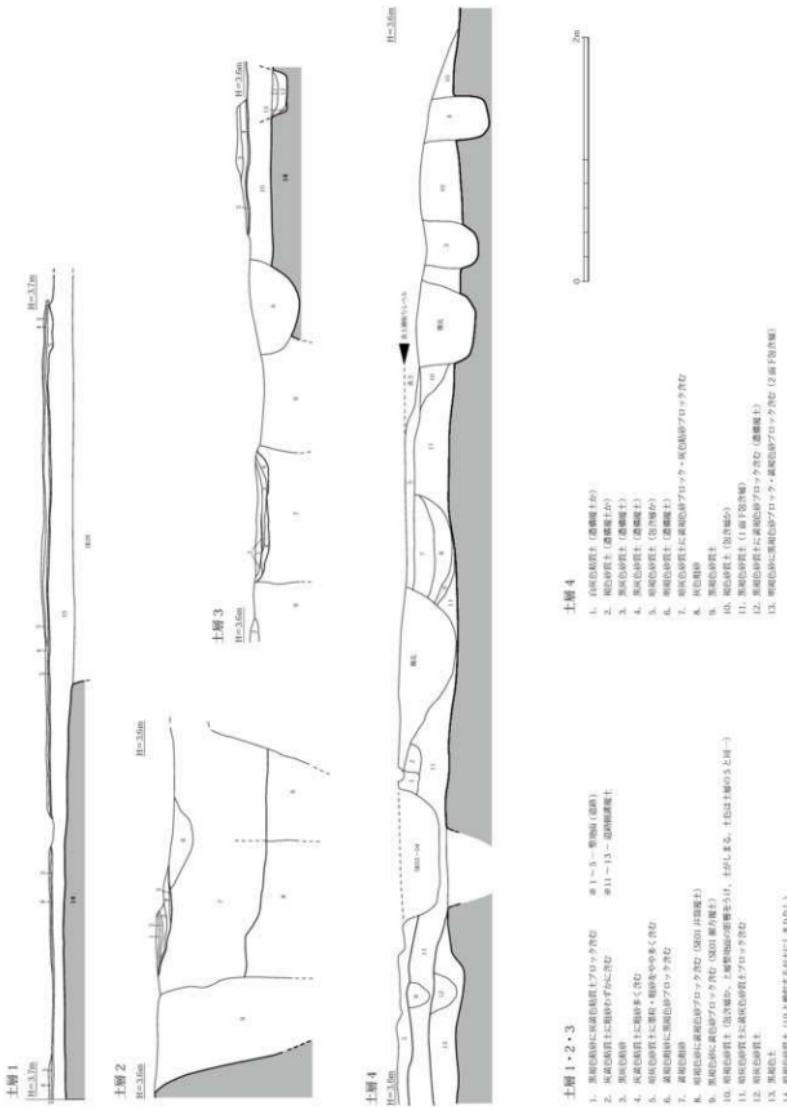


Fig6 調査区基本層序層序 (1/40)

井戸

井戸は4基検出した。近世以降の井戸が2基、中世の井戸が2基。井筒が明確なものは近世以降の瓦組井戸のみで、残りは抜き取りや腐食によって確認できなかった。

SE01 (Fig7)

1面の調査区北西で検出した。整地層の下に位置しているが、井筒部分が落ち込んだためか、整地層の一部が半円形に一段低く検出されたことから直下に井戸があることが分かった。掘方はやや不整形な円形を呈し、断面形は碗型をなす。井筒の痕跡は上記のとおり検出時から明確に認識できたが、井筒そのものは断面を精査しても確認できなかった。腐食の可能性が最も強いが、Fig6- 土層2に示す通り、井戸上層の一部が南北方向に攪乱されており、道路造営に伴う整地の前段階で井筒を抜いている可能性もある。以下の遺物から、17世紀～18世紀前半後の遺構と考えられる。

1は陶器擂鉢である。色調は茶褐色を呈する。2は現川焼の皿である。釉調は茶褐色を呈し、内面にはいわゆる巻刷毛目を施す。3は土製品である。猿を模したものか。

SE11 (Fig4)

1面の調査区西側で検出した近世以降の瓦組の井戸である。井筒の径が75cmであるのに対し、掘方の径が90cmであり、安全に掘削することが困難と判断し、掘削は断念した。

SE26 (Fig8)

2面の北西で検出した。SE01に東接する。掘方はやや不整形な円形を呈し、径は約330cmを測る。検出から約200cm程度掘削したところで、段をなすことから、この部分を井筒と判断し、さらに掘削して井筒痕跡を確認しようと試みたが、標高0.6m付近で湧水したため、以下の掘削は中止した。出土遺物には、未図化資料を含めても12世紀～13世紀のものが偏りなく出土している。したがって、ここでは若干時期幅をもたせ12世紀～13世紀中頃の遺構とする。

4～6は白磁塊である。4は玉縁口縁をもつIV類か。5・6はいずれも口縁端部が屈曲する碗V-4類である。7は白磁皿で、口縁端部が屈曲する皿IV-2類である。8～13は土師器皿である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.2cm・9cm・7.6cm。14～16は土師器環である。いずれも底部糸切りで器高・口径・底径の平均は2.7cm・13.5cm・9.7cm。17・18は土師器丸底环である。器高・口径の平均は3.6cm・16.5cm。19は平瓦である。薄く、外面に繩目タタキが残る。

SE65 (Fig9)

2面の南東部で検出した。掘方はやや不整形な円形を呈し、立ち上がりは直である。検出面から約140cm下に平坦面を設ける。井筒は中心からやや北寄りの部分に据えられている。井筒そのものは残存していないが、腐食した痕跡が平面、断面とともに確認された。結桶か。標高0.8m前後で湧水したため以下の掘削は中止した。以下の出土遺物から12世紀代の遺構と考えられる。

20・21は白磁塊である。20は玉縁口縁の口縁片。碗IV類か。21は体部を丁寧に打ち欠く。22～24は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、22は体部上半を丁寧に打ち欠く。器高・口径が分かる23・24の平均は、器高1.3cm、口径9.7cm。底径が分かる22・23の平均は6.8cm。25は楠葉型瓦器碗の口縁片である。口縁端部の沈線はないが、ミガキは丁寧に施される。26は土師質の鍋。外面ハケ目仕上げ、内面はヘラ状工具による強めのナデを施すが、雑で、粘土紐の継ぎ目が顕著に残る。

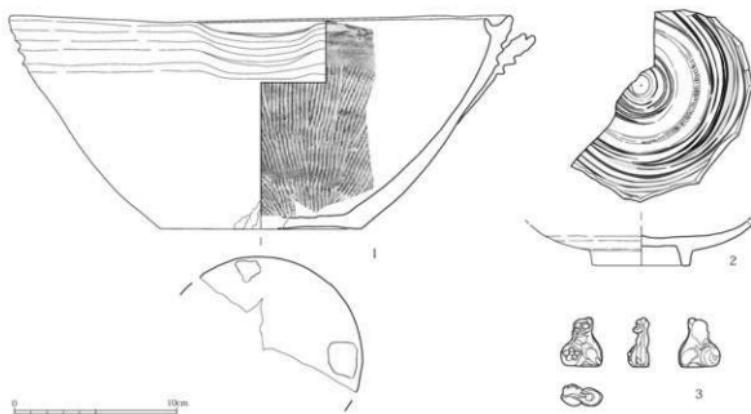
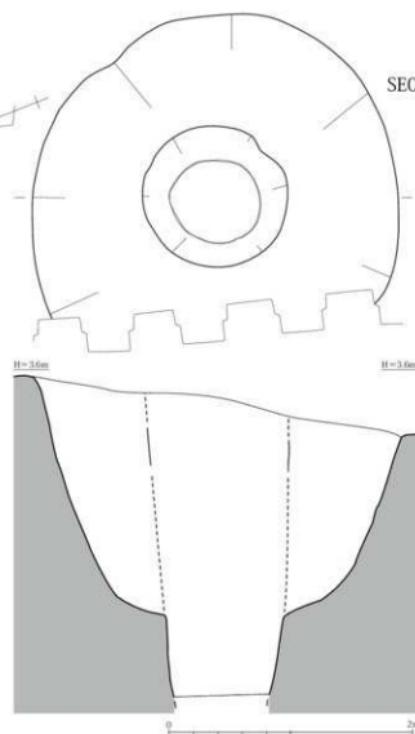


Fig7 SE01 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

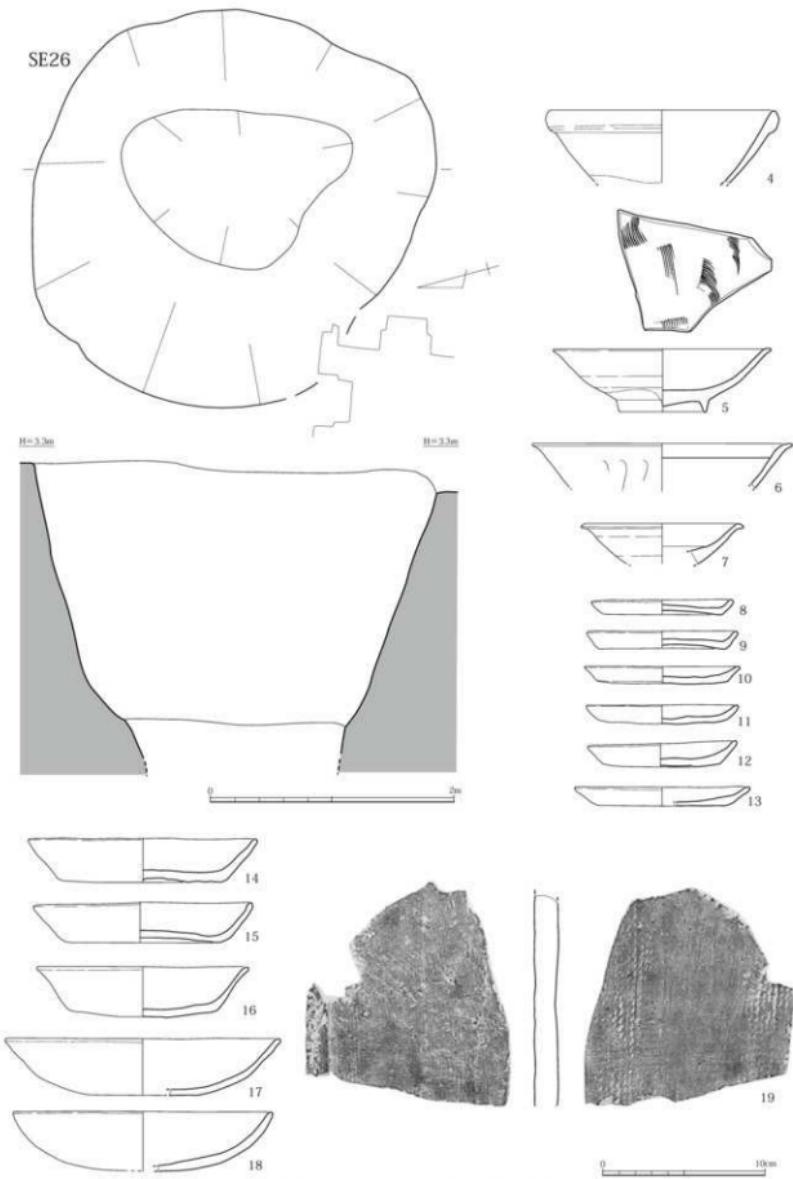


Fig8 SE26 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SE65

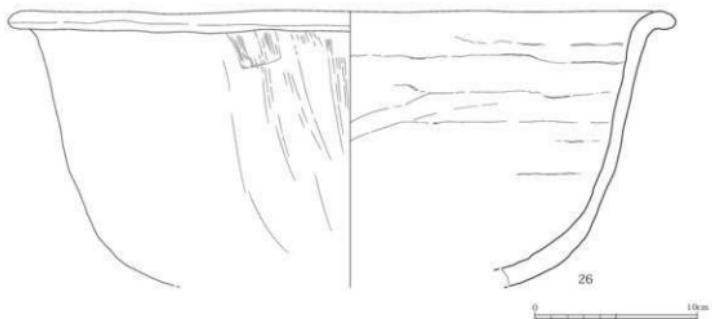
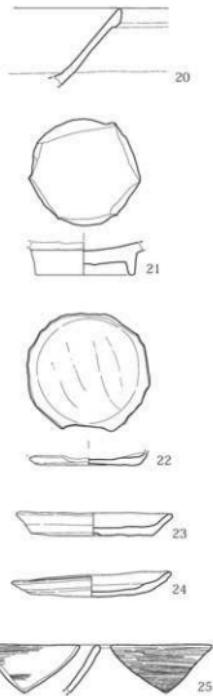
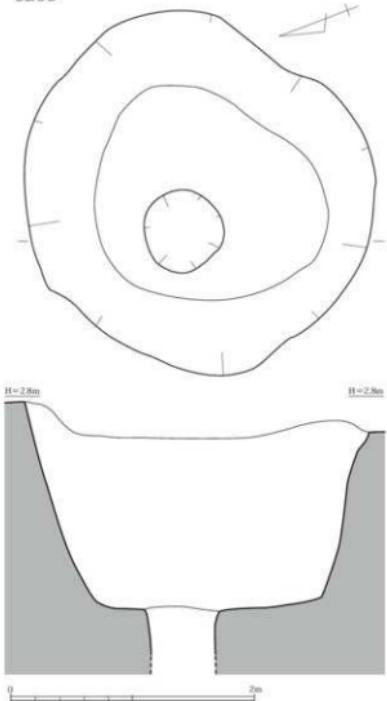


Fig9 SE65 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

溝

1面・2面で3条検出した。いずれも現在の街区に平行、もしくは直交する。

SD28 (Fig10)

1面の中央やや北寄りで検出した。両端を擾乱に切られる。断面は逆台形を呈し、残存状態は不良であるが、深い部分では25cm程度残存する。出土遺物はいずれも小片で、図化し得るものではなく、時期は不明。

SD43 (Fig10)

2面の北側で検出した。残りは悪く、断面は逆台形を呈するものと考えられるが、深さは最深部でも10cm程度しか残存していない。出土遺物はいずれも小片で、図化し得るものはない。

SD49 (Fig10)

調査区中央やや北寄りで検出した。2面で一部を検出し、当初は土坑として扱い、SK42の遺構番号を付していたが、3面で再検出した際、溝ということが明らかになった。断面は逆台形を呈し、深さは約45cmを測る。出土遺物は少なく、時期は不明。

図化した27は2面で土坑として掘削した際に出土した楠葉型瓦器碗の口縁片である。口縁端部に沈線を有し、体部外面・内面に密なミガキを施す。

土坑

1面・2面ともに多くの土坑を検出した。注目すべきは土師器集積土坑が集中することで、分布傾向からみれば調査区の南側に顕著である。

SK03・04 (Fig11)

1面の北側で検出した。壁面沿いに粘土を張った、いわゆる粘土貼付け土坑である。遺跡内では14次調査地点などで検出されている。平面および土層観察から2基の粘土貼付け遺構が同一地点で切り合っていることが分かった。SK03がSK04を切る。本遺構の用途は不明であるが、粘土除去後の底面に鉄分の沈着が認められ、滯水環境にあったことがうかがえる。出土遺物は少なく、いずれも小片で図化に耐えうるものはない。

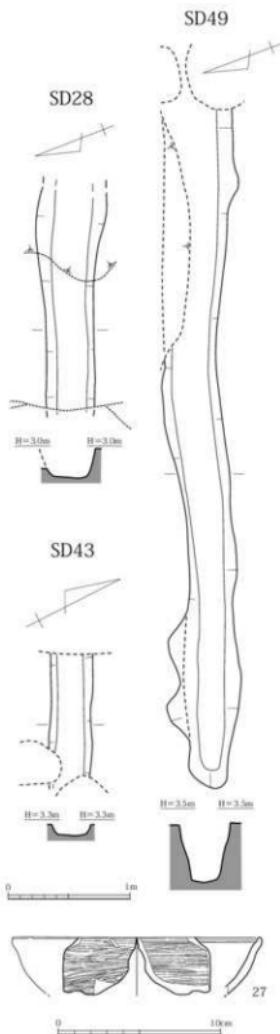


Fig10 SD28・43・49 実測図(1/40)
およびSD49出土遺物実測図(1/3)

SK05 (Fig11)

1面の北西端で検出した。北側は攪乱に切られる。断面はほぼ直に立ち上がり、深さは約 50cm 残存する。出土遺物で図化したのは 28 の瓦器碗 1 点のみで、詳細な時期は不明である。

SK08 (Fig11)

1面の中央やや北寄りで検出した。約 70cm × 100cm の不整方形を呈し、断面は逆台形を呈する。出土遺物が少ないため、時期の特定は困難であるが、以下の遺物から 12 世紀中頃～後半前後か。

29 は土師器壺である。底部は糸切りで、底径は 10.2cm。30・31 は土師器丸底壺である。いずれも底部ヘラ切りで、器高・口径の平均は 3.2cm・15.8cm。

SK09 (Fig12)

2面の北側で検出した。平面は約 130cm × 150cm の不整円形を呈し、断面は碗状にゆるやかに立ち上がる。深さは 20～40cm 残存する。以下挙げるようにまとまった量の土師器が出土している。出土遺物および SK10 との関係から 12 世紀中頃前後の遺構と考えられる。

32 は白磁皿 II 類である。33～37 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、平均は器高 1.1cm、口径 9.3cm、底径 7.2cm である。38～46 は土師器壺である。46 は SK10 出土小片と接合する。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 2.9cm・15.6cm・10.8cm である。

SK10 (Fig12)

2面北側で検出した土師器集積遺構である。土師器は図化した西側だけでなく、図にアミで示した東側にも集中していた。土師器の出土状況から東側から投棄されたことが分かる。平面は略方形を呈

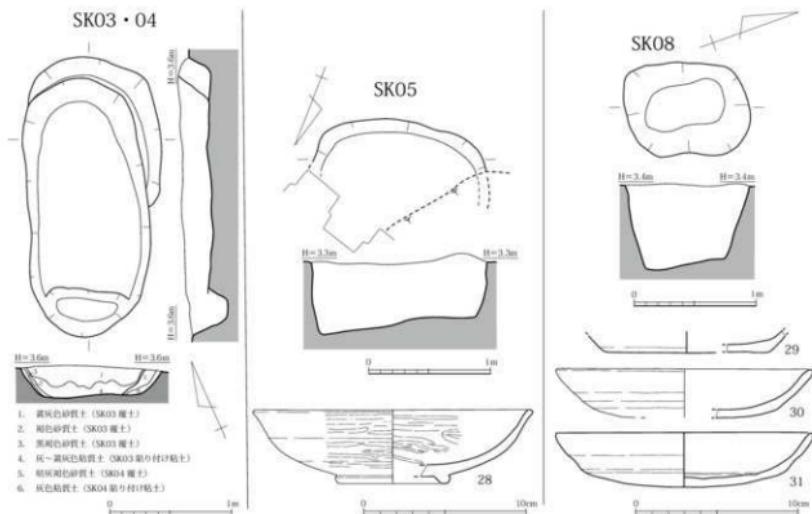


Fig11 SK03・04・05・08 実測図 (1/40) および SK05・08 出土遺物実測図 (1/3)

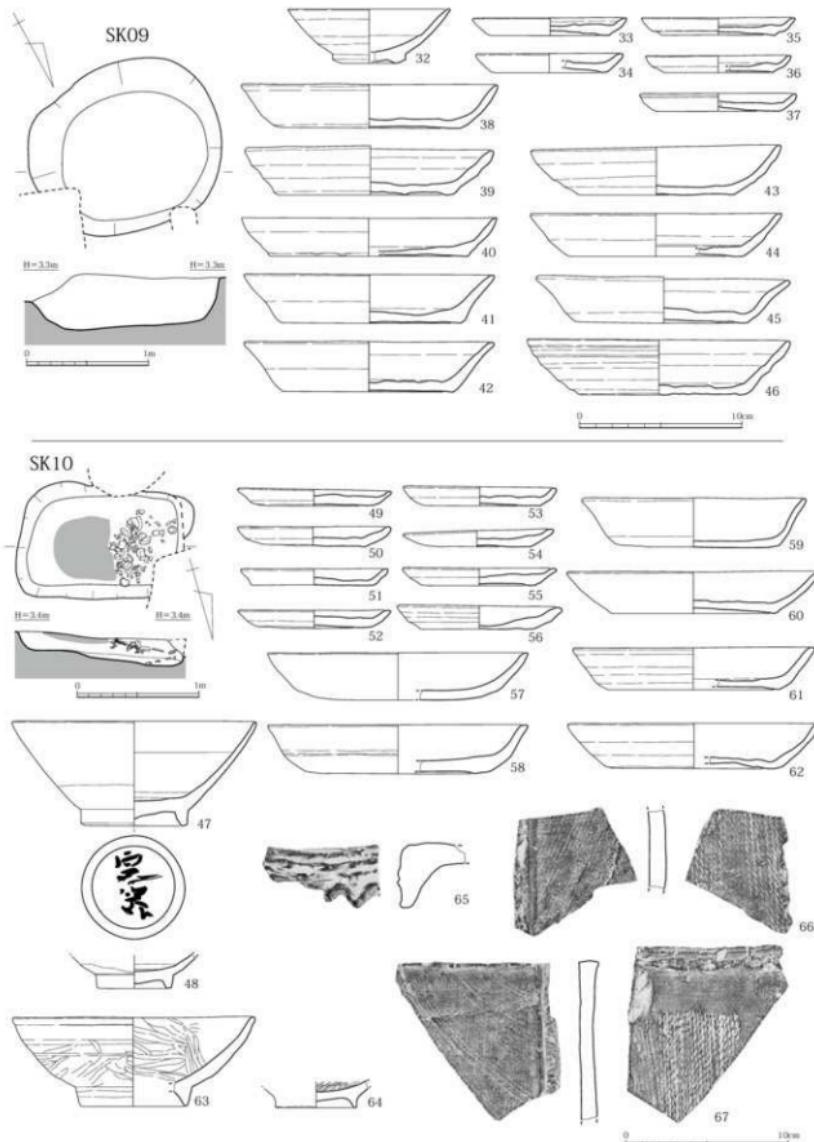


Fig12 SK09・10 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

し、深さは20cm程度残存する。以下の出土遺物から12世紀中頃前後の遺構と考えられる。

47は白磁塊Ⅶ類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。外底部には墨書きを有する。二文字の漢字と考えられるが、判読不能。48も見込みの釉を輪状に掻き取る白磁皿Ⅲ類である。49～56は土師器皿である。49～51は底部ヘラ切りで52～56は底部糸切り。法量は近似値を示し、器高・口径・底径の平均値は1.1cm・9.3cm・6.7cmである。57～62は土師器環である。観察で判断できた58～62は全て底部糸切りである。器高・口径・底径の平均値はそれぞれ2.8cm・15.3cm・10cm。63・64は瓦器碗である。63は筑前型瓦器碗。64は楠葉型瓦器碗の底部片である。ミガキは非常に丁寧で、隙間はない。65は波状押圧文軒平瓦の破片である。66・67は平瓦片。器壁は薄く、外面は縄目タタキが残り、内面は布目的一部分をナデ消す。

SK12 (Fig13)

2面の北西で検出した。約90cm×120cm+αのややいびつな長方形を呈する。南側にテラスを設け、深さは約25cmを測る。出土遺物は少ないが、11世紀後半～12世紀前半前後か。

68は土師器皿である。底部ヘラ切りで、器高1.3cm、口径9cmを測る。69は土師器丸底杯である。器高3.1cm、口径14.6cmで、内面にはコテ当て痕が残る。70は土垂である。長さ4.9cmで丁寧なナデによって成形される。

SK14 (Fig13)

2面の北西で検出した。ややいびつな略方形を呈し、南側にはテラス状の段を設ける。深さは最深部で約45cm残存する。以下の出土遺物から11世紀前後の遺構と考えられる。

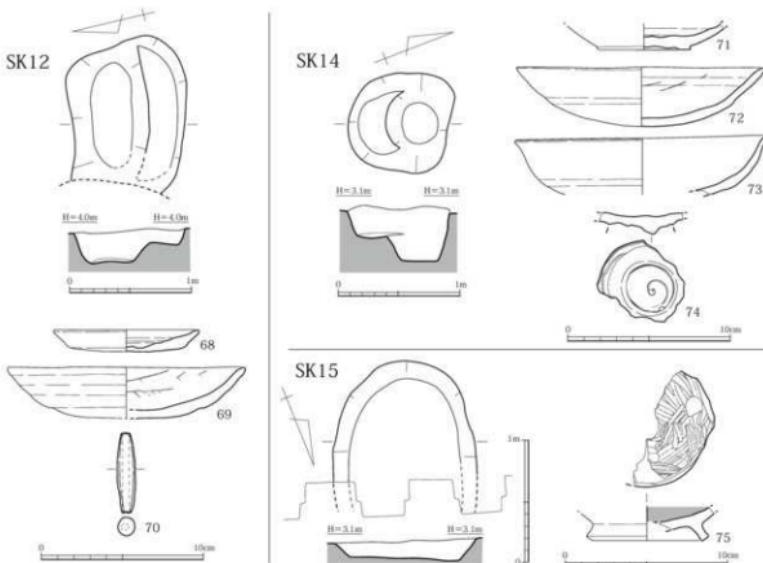


Fig13 SK12・14・15 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

71は須恵器である。十瓶山窯須恵器の円盤状高台碗か。底径は5.8cm。72・73は丸底坏である。72の内面にはコテ当て痕が残る。74は土師質の不明土器である。図下の凸部は接合部が剥離したものか。

SK15 (Fig13)

2面の北端で検出した平面橢円形を呈する土坑である。北半は調査区外に延びる。出土遺物のうち、図化し得たのは以下の1点のみで、直接の遺構の時期を示すものではない。

75は黒色土器A類の碗である。内面にはミガキの痕跡が残る。

SK16 (Fig14)

2面の中央やや北寄りで検出した。北側の約1/3は攪乱されている。平面は不整形をなし、断面は擂鉢状に直に立ち上がる。深さは約40cm残存する。以下の出土遺物から13世紀前半～中頃前後の遺構と考えられる。

76～78は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.2cm・9.2cm・6.7cmを測るが、78は器形および法量に若干の差が認められる。79～81は土師器坏である。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は2.7cm・13.2cm・9cm。

SK19 (Fig14)

2面中央西寄りで検出した。不正形の土坑である。断面は直に立ち上がり、深さは約45cmを測る。以下の出土遺物から12世紀後半前後に比定される。

82は土師器皿。底部糸切りで、器高0.9cm、口径10cm、底径8cmである。83は土師器坏である。底部糸切りで、器高2.6cm、口径16cm、底径9.2cm。84は瓦器碗である。内外面のミガキははっきりと確認できる。

SK27 (Fig14)

1面北東部で検出した。東西の両端を攪乱に切られるが、残存部から円形を呈するものと想定される。出土遺物で図化し得たのは以下の1点のみで詳細な時期は不明。

85は白磁碗である。底部は低く厚い。碗IV類か。



Fig14 SK16・19・27 実測図 (1/40)
および出土遺物実測図 (1/3)

SK29 (Fig15)

1面の中央部で検出した。北東側は複数の攪乱によって切られるが、不正円形を呈するものと想定される。立ち上がりは直で、断面は箱型を呈する。以下の出土遺物から12世紀中頃前後に比定できる。

86・87は土師器皿である。いずれも底部ヘラ切りである。器高はそれぞれ1.2cmで、口径は9.8cm、9.2cm。88は土師器壺である。底部糸切りで、器高3.1cm、口径16cm、底径10.4cm。

SK31 (Fig16)

1面の中央部で検出した。東側および北側を攪乱に切られるが、残存部から比較的整った長方形を呈する遺構と考えられる。南側に段をもち、断面は直線的である。深さは約35cmを測る。土師器他の遺物がまとめて出土した。以下の出土遺物から12世紀中頃前後の遺構であると考えられる。

89は白磁皿である。90～94は土師器皿である。いずれも底部ヘラ切りだが、90～92は丸底を呈し、93・94は平底化傾向が強い。このうち92の法量は皿と壺の中間的な数値を示すが、他の丸底壺とは大きく異なることからここでは皿として報告する。器高2.5cm、口径10.6cm。92を除いた法量の平均は器高1.5cm、口径9.4cm。95～99は丸底壺である。いずれも底部ヘラ切りで、法量の平均は器高3.2cm、口径15cmである。100・101は土師器壺である。両者とともに底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、2.9cm・14.5cm・10cm。102は瓦器碗である。103は高台付の碗である。内外面にミガキを施す。その他Fig33に示した石鍋も出土している。

SK32 (Fig16)

1面の北側で検出した。南西部を攪乱に切られる。断面形はやや丸みをもちながら立ち上がり、東側には段をもつ。深さは最深部で約60cm残存する。上層の中心から土師器が集中して出土することから、土坑埋没の最終段階で一定単位の土師器を投棄したものと考えられる。以下の土師器の法量にはバラつきがあるため、時期幅をもたせて13世紀代の遺構としておく。

104～108は土師器皿である。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、1.3cm・9.1cm・6.9cm。109・110は土師器壺である。両者とも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、2.7cm・13.5cm・9.2cm。111は畿内産瓦器の皿である。体部上半と下半で接合しなかったため、図上復元している。器壁は極めて薄く、内外面には細筋のミガキが確認されるが、略化傾向が強く隙間が目立つ。見込みには暗文による文様を施す。楠葉型瓦器か。

SK33 (Fig16)

1面の北側、SK32の東で検出した。北半は攪乱によって切られるが、円形を呈すると考えられる。破片を中心とする土師器がまとめて出土した。SK32とほぼ同時期の13世紀代の遺構と考えられる。

112～114は土師器皿。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、1.1cm・9cm・7.2cmである。115は土師器壺。底部糸切りで、器高2.3cm、口径13cm、底径9cmを測る。

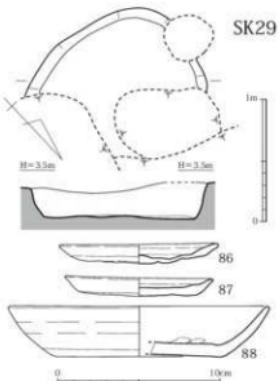
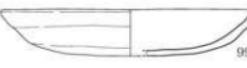
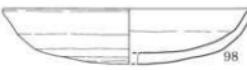
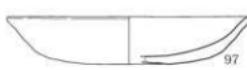
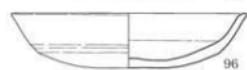
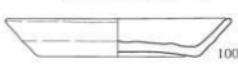
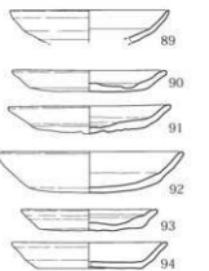
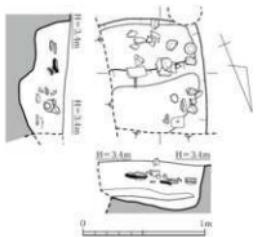


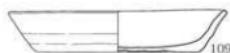
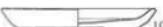
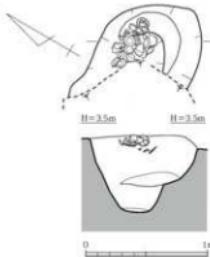
Fig15 SK29 実測図 (1/40)
および出土遺物実測図 (1/3)

SK31



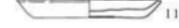
0 10cm

SK32



0 10cm

SK33



0 10cm

Fig16 SK31・32・33 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SK34 (Fig17)

2面の北東部で、溝状の擾乱にかかる形で検出した。平面は約60cm × 100cmの丸みをもつ長方形を呈する。断面は碗型に内湾しながら立ち上がり、東側にはテラス状の段をもつ。覆土中に大量の焼土を含み、中層～上層からは完形のものを含む土師器が複数点出土している。以下に挙げる出土遺物から11世紀前半前後の遺構と考えられる。

116～118は土師器皿。全て底部ヘラ切りで、器高・口径の平均は1.4cm・10.3cmである。119は土師器碗である。内外面には比較的丁寧で密なミガキが施される。120・125は土師器丸底杯である。120・121は内面にコテ当て痕が認められ、特に121に顕著である。122は内面が光沢があり、単位は確認できないが、ミガキを施しているものと考えられる。123も部分的にあるが、内面の上半にミガキを施すか。丸底杯の法量は比較的近似値を示し、器高・口径の平均は3.3cm・14.9cmである。

SK36 (Fig18)

1面の北東で検出した。西側が擾乱されるが、残存部から円形を呈するものと推定される。深さは浅く、検出面から約12cm程度で床面となる。出土遺物は図化したものに土師器小片を数点確認している。

126は白磁塊の口縁片。玉縁口縁を有する碗IV類である。127は黒色土器B類の碗である。高台の径は小さい。

SK38 (Fig18)

2面の北東で検出した平面不整形の土坑である。西側を擾乱によって切られる。床面はほぼ平坦であるが、断面形は浅い碗型状をなし、立ち上がりはゆるやかである。以下の出土遺物から13世紀代と考えられる。その他、混入資料ではあるが、本遺跡においてはじめて遺構が形成される弥生時代のものがある。

128・129は土師器皿である。両者ともに底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.2cm・8.8cm・7.1cmである。130・131は土師器環である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は2.8cm・13.3cm・8.8cmである。132は黒色土器B類の碗である。体部上半の外反は鈍く、高台の径は小さい。133は弥生時代後期初頭の甕である。口縁は「く」の字型を呈し、頸部には突縁を巡らせる。体部内・外面とともにハケ目仕上げで、胴部最大径は口縁径をやや上回る。

SK39 (Fig18)

2面の東側で検出した。ピットおよびSK40に切られる。平面は略方形を呈し、断面は床面は丸みをもつが、立ち上がりは直である。出土遺物には、図化したもの以外に底部ヘラ切りを主体とする土

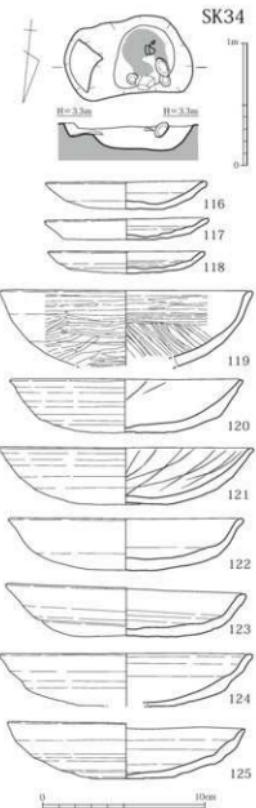


Fig17 SK34 実測図 (1/40)
および出土遺物実測図 (1/3)

師器小片が出土したことから、12世紀前半前後
の遺構と考えられる。

134は白磁壺V類。高台は細く高い。135は白
磁皿である。低く厚い高台をもつ皿II類か。

SK40 (Fig18)

2面の東端で検出した平面方形の土坑である。
SK39を切る。深さは80cmを測り壁面はほぼ直
に立ち上がる。遺物には混入資料が多く、時期は
不明。

図化した136は楠葉型瓦器碗の口縁片である。

SK41 (Fig19)

2面の東側で検出した。平面は不整形を呈し、
深さは約15cm程度残存する。以下の出土遺物
および確認した未図化資料から10世紀～11世
紀前半の遺構と考えられる。



Fig18 SK36・38・39・40実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

137は土師器皿である。底部ヘラ切りで、器高1.3cm・口径9.6cm。138は土師器杯、もしくは碗である。内面には密なミガキの痕跡が認められる。139は器高が高いためここでは碗とする。内面にはコテ当て痕がわずかに残る。140は黒色土器A類の碗である。

SK43 (Fig19)

2面の中央部で検出した。平面は約100cm×130cmの卵型を呈し、断面は碗型を呈する。深さは約40cm残存。以下の出土遺物以外に底部糸切りを主体とする土師器を確認しており、12世紀中頃～後半前後の遺構と考えられる。

141は白磁塊の底部片である。142～147は土師器皿である。底部の切り離しは、観察できなかった147を除き全て糸切りである。143～145はいずれも見込み部が極めて薄く、意図的に押し出すことで丸底化を図っていることが分かる。器高・口径の平均は1.3cm・9.4cmである。

SK44 (Fig19)

2面の中央部付近で検出した。SK43に切られる平面不正円形の土坑である。深さは最深部で40cm程度を測る。以下に図化した遺物以外に、底部ヘラ切りと糸切りの土師器が混在することから、12世紀中頃前後の遺構と考えられる。

148は白磁塊である。口縁下および見込み部に沈線が認められる。

SK50 (Fig20)

2面南側で検出した。遺構の大半が攪乱によって切られ詳細は不明であるが、残存部からは図示したとおり、多数の土師器が確認され、土師器の一括廃棄遺構であるということが分かる。平面は不整円形で、断面は碗型を呈する。深さは確認できた部分で90cm残存。まとまった遺物が出土するが、陶磁器が占める割合は極めて低い。以下に示す遺物から本遺構の時期は12世紀後半に位置付けられる。

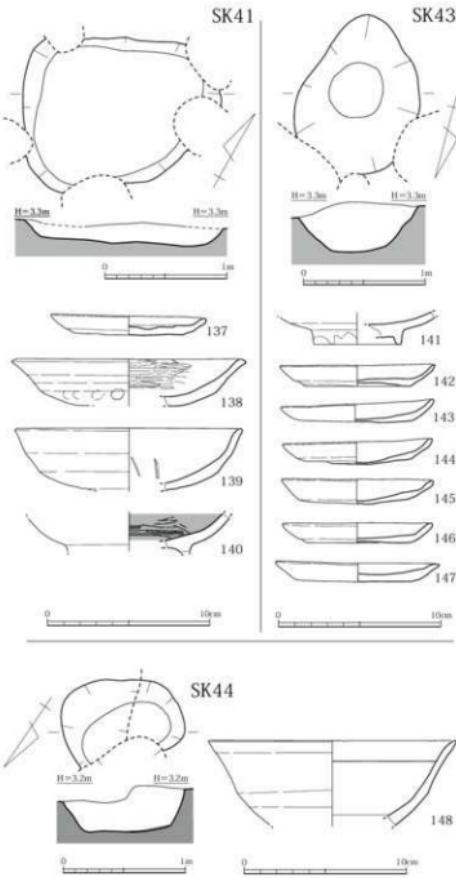


Fig19 SK41・43・44 実測図 (1/40)
および出土物実測図 (1/3)

149は龍泉窯系青磁碗の体部片。内面には劃花文を施し、口縁部はわずかに外反する。150は同安窯系青磁皿である。見込みにジグザグ状の点描文を施す。151～161は土師器皿である。全て底部糸切りである。器形に若干の違いはあるが、法量は近似値を示し、器高・口径・底径の平均は1.2cm・9.2cm・7.2cmである。162～174は土師器杯である。全て底部糸切りで、法量は皿同様近い数値を示し、器高・口径・底径の平均は2.9cm・15cm・10cmである。

SK51(Fig21)

調査区の南端で検出した平面不正円形の土坑である。南側は調査区外に延びる。断面は碗型を呈し、深さは最深部で約50cm残存。中層以下から土師器がまとまって出土した。土師器は完形のものに他に体部を打ち欠くものを複数確認している。以下に図示した出土遺物から13世紀代の遺構と考えられる。

175は白磁皿である。混入資料か。176～181は土師器皿である。いずれも底部糸切りである。179～181は体部上半を打ち欠く。法量が分かる176～178の器高・口径・底径の平均は、1.2cm・8.4cm・6.5cmである。182～188は土師器杯である。全て底部糸切りである。186～188は皿同様体部を打ち欠く。182～185の器高・口径・底径の平均は2.6cm・13.2cm・9.3cmであるが、器形で大別すると、立ち上がりが直で器高が高い182・183と、やや内湾しながら立ち上がる184・185に分かれれる。器高・口径・底径の平均は、前者が2.9cm・12.9cm・8.9cm。後者が、2.4cm・13.7cm・9.7cm。189は須恵器甕の胴部片である。

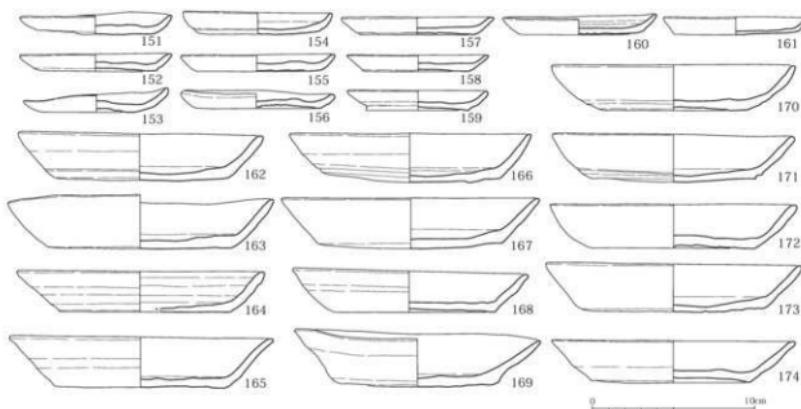
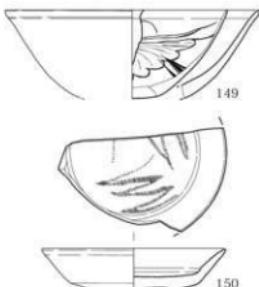
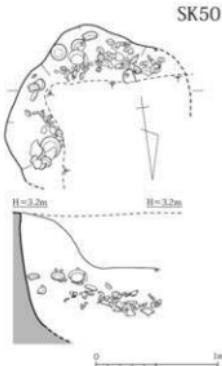


Fig20 SK50 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK52(Fig22)

調査区の南端で検出した。当初は1基の土坑として検出・掘削していたが、床面直上で別遺構ということが明らかになった。南側の遺構が北側の遺構を切る。検出した時点で土師器がまとまって出土したことから、以下にも同様に土師器が集中するものと想定していたが、覆土中からわずかに出土するのみでまとまった量の土師器は認められなかった。したがって、土坑と土師器の直接的な因果関係は不明。土坑の埋没の最終段階で投棄した可能性が強いが、完全な埋没後に生活面上に捨てられた可能性は否定できない。以下図示する遺物のうち上層の土師器、覆土中の遺物とともに底部は糸切りであり、遺構は12世紀後半前に比定される。

190～194は土師器坏である。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は2.8cm、15.8cm、10.3cm。195・196は楠葉型瓦器碗の口縁片。いずれも口縁端部に沈澱をもち、器壁は厚く、遺構の時期まではくだらないものと考えられる。

SK53(Fig22)

SK52の東側で検出した。SK52同様、上層に一定単位の土師器が集中する。土師器群堆積層の断面は、わずかにではあるが碗型を呈することから、土坑がほとんど埋没した時点わずかに残った窪

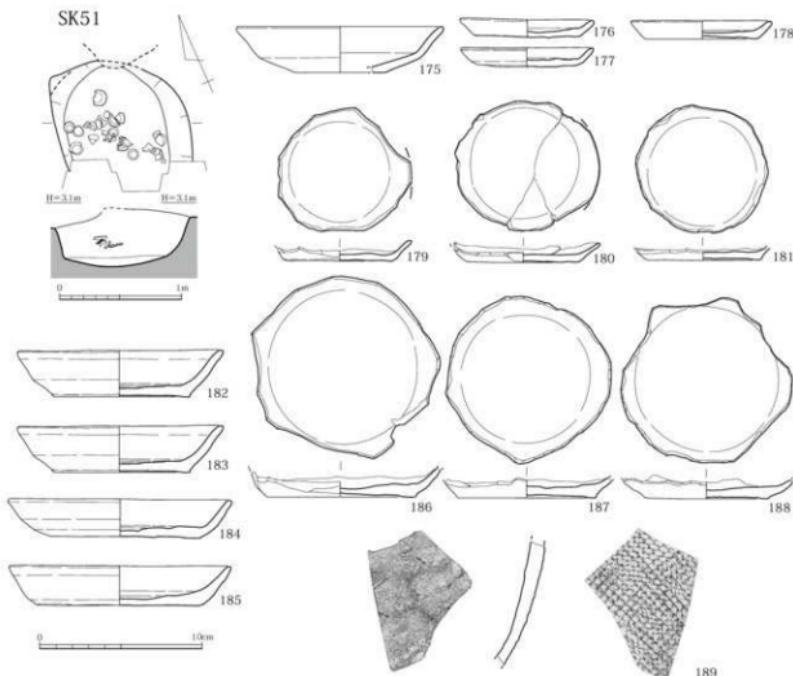


Fig21 SK51 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

み部分に廃棄したことが推察される。土坑は楕円形を呈し断面形は直に立ち上がる。出土した遺物は土師器を主体とし、図化したもの、覆土中出土のものとともに糸切りとヘラ切りが混在する。量としては底部糸切りの土師器が若干多い。以上から12世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

197～203は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.2cm・9.5cm・7.3cmである。204～206は土師器壺。いずれも底部ヘラ切りで、器高・口径・底径の平均は2.8cm・15.2cm・11cmである。204は体部下半に段をもつが、丸底壺に近い器形をもつ。207・208は筑前型瓦器碗である。ミガキははっきりと確認でき、底部の押し出しも丁寧で、丸底化への意識は強い。

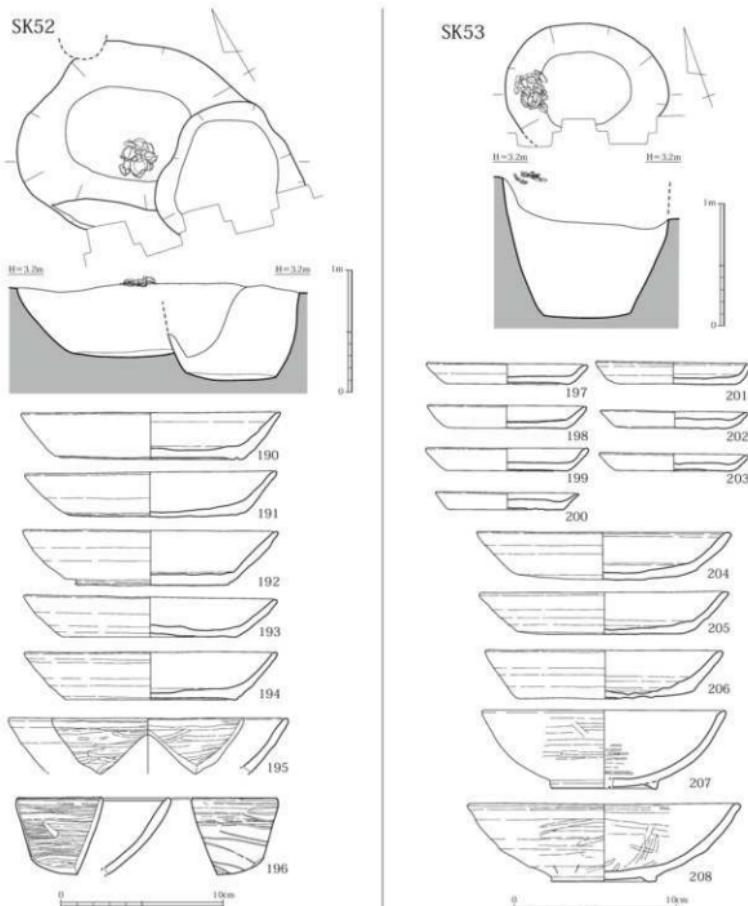


Fig22 SK52・53 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

SK54(Fig23)

2面の南側で検出した。径 100cm 程度の平面不正円形を呈する。断面はほぼ直に立ち上がり、深さは 75cm 程度残存する。以下の出土遺物から 13世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

209・210は龍泉窯系青磁である。209は蓮弁文を有する碗II類である。210は碗もしくは鉢か。211～213は土師器小皿。全て回転糸切りである。法量の平均は器高 1.1cm、口径 9cm、底径 6.9cm。214～220は土師器坏である。全て底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は 2.5cm・13cm・9.2cm。221・222は黒色土器A類の碗である。221は口縁片、222は底部片。混入資料である。

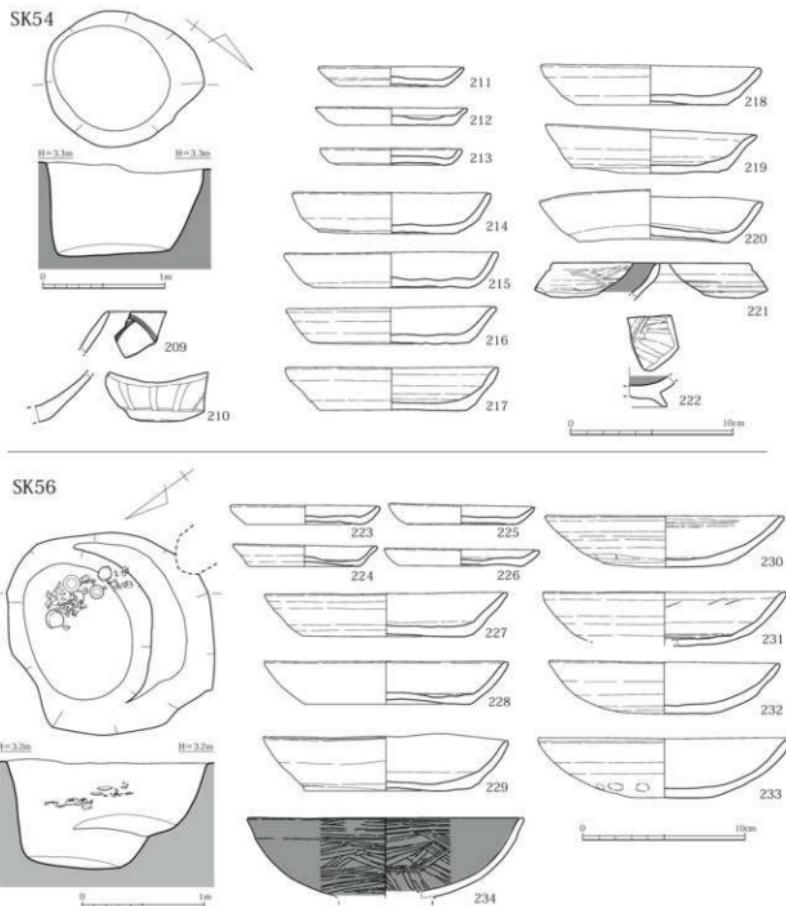


Fig23 SK54・56 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK56(Fig23)

調査区南側、SK54の西側で検出した。平面は不整形を呈する。断面はやや緩やかではあるが直線的に立ち上がり、南側にはテラス状の段を有する。最深部での深さは90cm程度残存する。中層からまとまった数の土師器が出土した。出土状況からみて南側から投棄された状況がうかがえる。以下の出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

223～226は土師器皿である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.2cm・9.2cm・7.2cm。227～229は土師器杯である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は、2.9cm・15cm・10.3cm。230～233は土師器丸底杯である。器高・口径の平均は3.4cm・14.8cm。234は黒色土器B類の碗である。内外面にミガキの痕跡が残る。

SK59(Fig24)

調査区南西部で検出した。平面は不整形。断面の立ち上がりはほぼ直で、深さは約95cm残存する。以下の出土遺物から12世紀中頃～後半前後の遺構と考えられる。

235～237は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は、1cm・8.4cm・6.4cmである。238は土師器杯である。底部糸切りで、器高は3cm、口径は14.8cm、底径は9.2cmを測る。239は瓦器碗である。高台は低く、底部は丁寧に押し出され丸底化する。240は白磁碗VII類である。器壁は厚く、内面には片彫りによる草花文を施す。241は白磁碗VII類である。242・243は同安窯系青磁碗である。242は体部を打ち欠く。243は大型の碗で、色調は釉が明黄褐色、胎土はにぶい黄橙

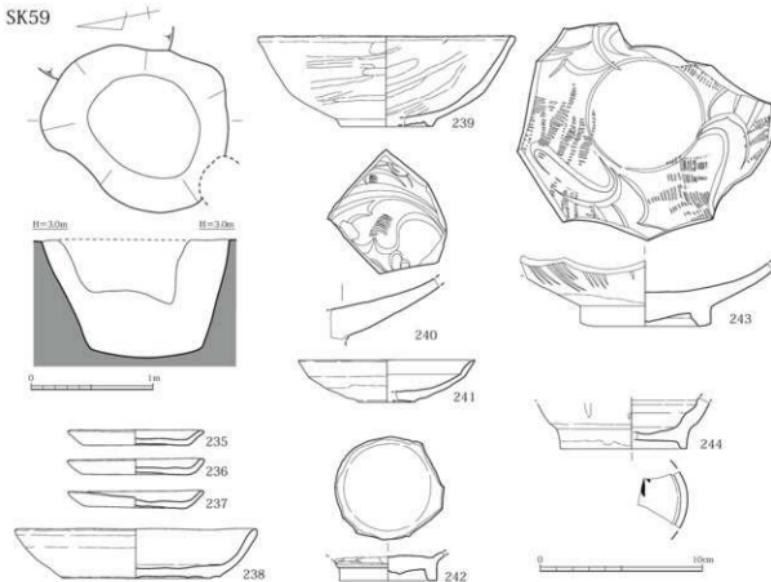


Fig24 SK59実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

色を呈する。外面には櫛目文、内面には点描文と略化した花文を有する。244は青白磁である。壺か。外底部には墨書きが認められる。

SK61(Fig25)

2面の調査区中央南寄りで検出した平面不整形の土坑である。南側を攪乱によって切られる。深さは約55cm程度残存し、西側はほぼ直に、東側はゆるやかに立ち上がる。中層以下から土師器がまとまって出土した。以下の出土遺物から13世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

245・246は土師器皿である。いずれも底部糸切りである。両者の法量の平均は器高1.1cm、口径8.4cm、底径6.5cm。247～257は土師器環で、255～257は体部を打ち欠く。すべて底部糸切である。法量に著しい差はないが、器形を大別すれば体部下半に段、もしくは丸みをもち口縁にむかってやや外反しながら立ち上がる247～252と底部から口縁にむかってほぼ直もしくはわずかに内湾しながら立ち上がる253・254に分かれる。器高・口径・底径の平均は、2.6cm・13.2cm・9.6cmである。258・259は龍泉窯系青磁碗である。258は口縁片である。外面に鎬蓮弁文を有する。259は体部を打ち欠く。260は瓦質の捏鉢である。

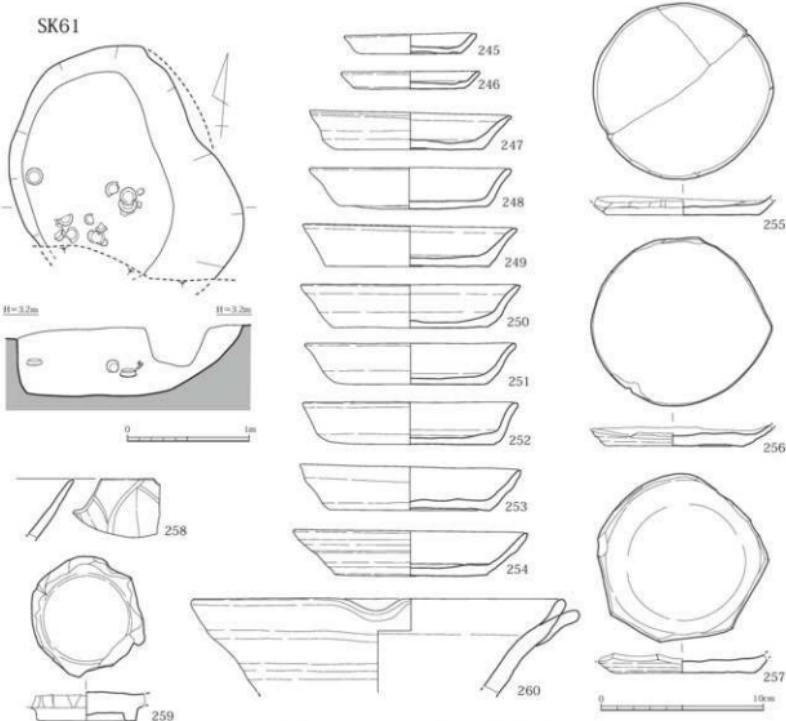


Fig25 SK61 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK62(Fig26)

2面の調査区西側やや南寄りで検出した。西側の一部をピットに切られる。平面はやや不整形ではあるがほぼ円形を呈し、壁面の立ち上がりは直で、西側および北東側にテラス状の段をもつ。深さは最新部で100cm程度残る。ほぼ單一層をなし、覆土中には図化し得ない程度の土器小片が上層から床直上までびっしりと詰まっていた。他の土器集積遺構とは全く異なり、出土した土器は土坑に廃棄される段階すでに小片化しており、それらが一気に埋められたものと推定される。以下図示した遺物は残りがいいものを選別しているため、出土遺物のごく一部である。以下の遺物から13世紀前半前後の遺構に比定される。

261～268は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は1.3cm・8.8cm・7cmである。269～277は土師器環である。全て底部糸切り。器高・口径・底径の平均は2.9cm・13.6cm・9.9cmである。278は白磁塊である。碗Ⅶ類で、内面見込みの釉を環状に搔き取る。279は畿内産瓦器碗の底部片である。楠葉型瓦器碗か。高台は低い三角形を呈し、器壁は薄い。ミガキの痕跡は確認できないが、内面は光沢をもつ。炭素の吸着が悪いためか、色調は内外面ともに黄白色を呈する。類例は、近接する15次調査で確認されている。280は羽口である。一部が被熱により灰白色化する。

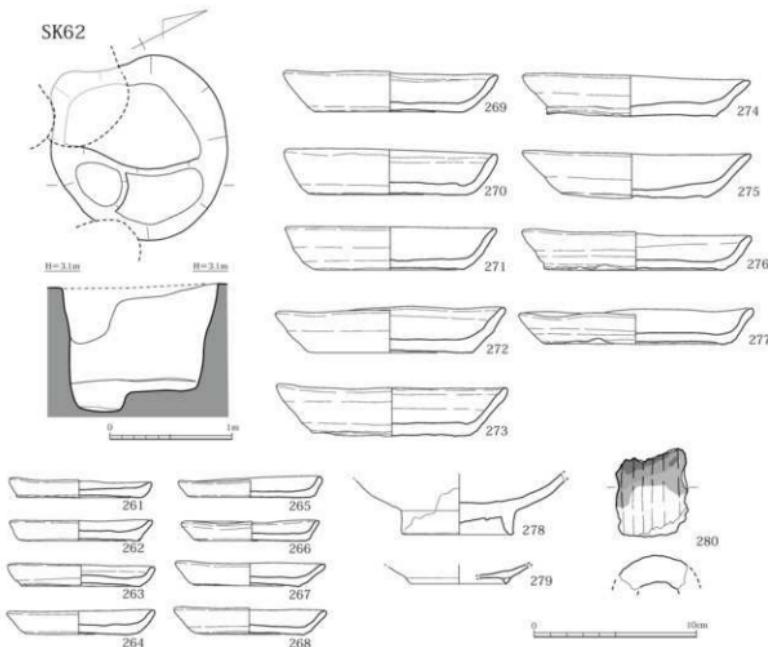


Fig26 SK62実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK63(Fig27)

2面の南西端で検出した。平面は楕円形を呈し、深さは最深部で約70cm残存する。以下の出土遺物と近接するSK59との関係から12世紀中頃～後半前後の遺構と考えられる。

281・282は土師器皿である。いずれも底部糸切り。底部形態に違いはあるが、法量は近似値を示す。器高・口径・底径の平均は1cm・9.3cm・7.2cmである。283～285は土師器皿である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は2.7cm・

14.4cm・10.7cm。286は白磁塊Ⅶ類である。見込みの軸を環状に掻き取る。高台は厚く、外面の下半を露胎とする。287は褐釉陶器の碗口縁片である。端部に平坦面を設ける。

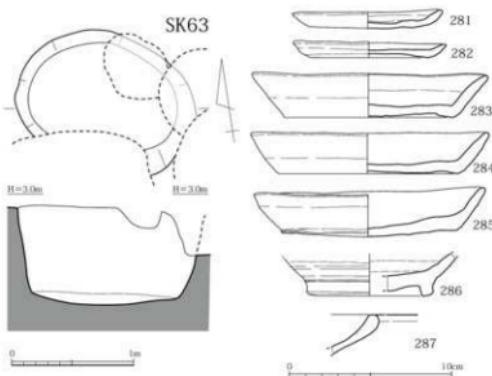


Fig27 SK63 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物 (Fig28)

ここでは1面・2面の主要遺構以外から出土した遺物をまとめて報告する。288は1面上整地層中から出土した楠葉型瓦器盤の口縁片である。289・290は1面ピット出土。289は畿内産の瓦器碗。楠葉型瓦器か。成形に伴うものか。器壁の一部が内側にへこむ。290は楠葉型瓦器碗である。口縁端部に沈線を有する。291は1面遺構検出時に出土した十瓶山窯系須恵器の小片か。292～317は2面のピット、遺構検出時、覆土、包含層出土遺物である。292・293は龍泉窯系青磁碗である。292はII類の口縁片。293はI類である。294～298は白磁塊である。294・295は口縁片。296～298は底部片。296は見込みの軸を掻き取るVII類である。297は体部を丁寧に打ち欠く。298は外底面に墨書を有する。残存部の文字は「成」か。299は白磁皿である。300は高麗青磁碗か。体部外面には蓮弁文を有し、高台には目跡を残す。301・302は陶器盤の破片である。303は円盤状土製品である。304は底部糸切りの土師器皿の小片である。底部には墨書を有するが、判読不明。305も土師器皿の小片。外面に円盤状に焼けた痕が複数観察される。306は瓦器環である。押し出しにより丸底化する。外底面には4分割のミガキが施され、内面見込み部にはジグザグ状の連続ミガキが複数回施されたことが分かる。307～311は瓦器碗である。307は筑前型瓦器碗。顕著な略化傾向は認められない。308～311は楠葉型瓦器碗である。308は遺構検出時にはほぼ同一地点で出土した個体である。接合しなかったため図上復元した。口縁端部には沈線が施され、内面のミガキは非常に密。外面はわずかに隙間が認められるが、顕著な略化は認められない。309～311も丁寧なつくりで、口縁端部には沈線が残り、ミガキも隙間が少ない。312は畿内産瓦器の环である。外面のミガキは口縁付近の1/3程度しか施されず、内面のミガキも隙間が目立つ。313は須恵器高环である。314は管状土垂である。315・316は羽口である。317は不明土製品。上面には複数の不規則な指頭痕が残り、底面は平坦面をなすことから、平坦面上で粘土塊を捏ねたものが、何らか理由で火を受けて土製品状になったものだろう。底には墨書状の痕跡が残るが判然としない。

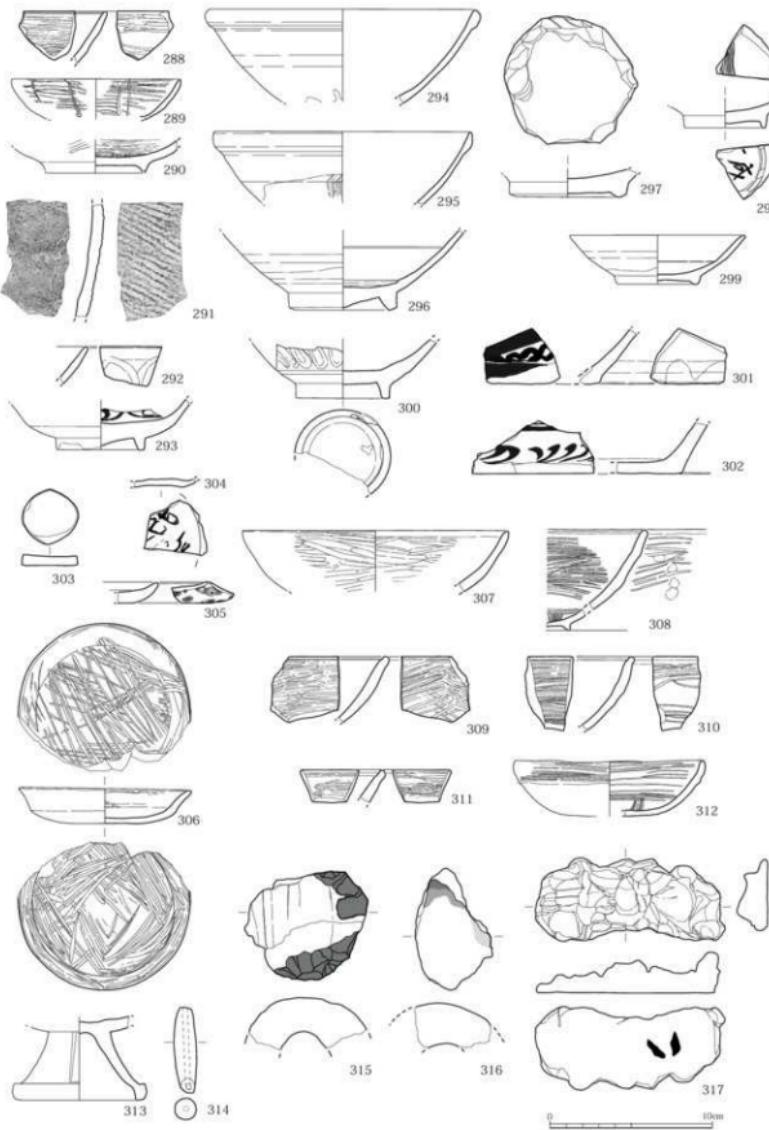


Fig28 1面および2面遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物実測図（1/3）

(3) 3面の調査

3面は黄色砂基盤層上に設定し調査を実施した。この面で調査した遺構の大半は2面までに検出できなかった遺構が中心となるが、宮崎宮創建時期に近い遺物を含む遺構や古墳時代の遺構も検出している。

土坑

3面で検出した主要遺構は全て土坑である。鋳造に関するものと推定される遺構や方形竖穴状遺構が検出されている。

SK22(Fig29)

調査区の中央北西寄りで検出した平面椭円形の土坑である。南東部をSE26およびピットに切られる。床面でピット状の掘り込みを検出したが、本遺構に伴うものかは不明。以下の遺物のうち遺構図にも図示した土師器は、器形その他の特徴から10世紀～11世紀のものと考えられ、本遺構もその前後に比定されよう。

318は高台付の碗である。器形は丸みをもつ口縁端部付近はわずかに外反する。内面にはコテ当て痕が残るが全体的に丁寧に成形されている。高台はやや外側に張り出す。器壁は光沢をもち、色調は灰黄色を呈する。319は平瓦片である。外面には斜格子タキ具痕、内面には布目が残る。

SK23(Fig29)

調査区北端で検出した。北側が矢板打ち込みの際の攪乱で不明だが、平面略方形を呈すると想定される。壁面はほぼ直に立ち上がり、西側にテラス状の段をもつ。深さは40cm程度残存し、上層～中層で土師器がまとめて出土した。以下の出土遺物から12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

320は土師器皿である。底部糸切りで、器高1.1cm、口径9.1cm、底径7cmを測る。321～323は土師器壺である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は2.9cm・14.8cm・10cm。

SK24(Fig30)

調査区の中央やや北寄りで検出した。西側をSE26およびSK25に切られる。上層～中層にかけては墨を含む黒色粘砂が、下層にはやや汚れた明褐色砂質土層堆積するが、両層の間、明褐色砂質土直上から鍋状を呈する土製品、および棒状の土製品が出土した。棒状の土製品は遺構の壁面に沿うように鍋状のものは遺構の中心でやや倒れた状態で検出された。注目すべきは、以上の土製品は全く火を受けていないことである。本遺構掘削時の天候は少雨であったが、滲水した土製品は移植ゴケがわずかに当たるだけで傷がつくほど脆くなってしまっており、記録後それ以上の水分を含まないよう養生し、乾かして取り上げた。出土遺物には他に土師器の小片がある。底部糸切り・ヘラ切りの両者を確認してい

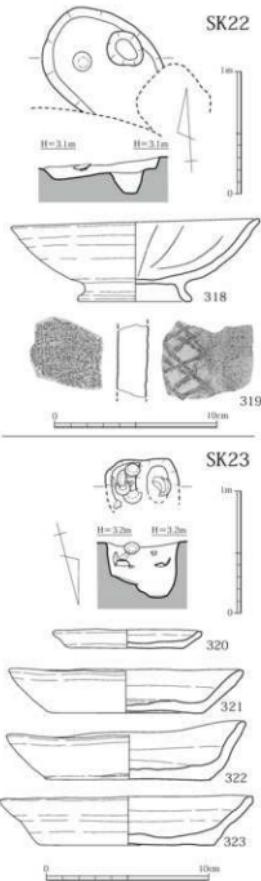


Fig29 SK22・23 実測図 (1/40)
および出土遺物実測図 (1/3)

るが、時期の特定は困難である。

324は錫形の鋳型状土製品である。器壁の厚さは2.5cm～4cm程度で、やや外傾しながら直線的に立ち上がる。内底面はほぼ平坦で、壁面沿いはわずかに段をもつ。325は棒状土製品の一部である。洗浄をしていないため、砂が付着しており、断面はややいびつな方形だが、本来はほぼ正方形を呈していたものと推定される。

SK25(Fig30)

調査区中央やや北寄りで検出した。SK24を切る。西側はSE26に切られ、北側はSK24との切り合いを認識できずに掘削したため残存していない。SK24の土層観察から本遺構がSK24を切るということが明らかになった。出土遺物にはSK24同様底部糸切り・ヘラ切りの土師器がある。

326は土師器皿。底部ヘラ切りで、器高1.6cm、口径9.1cmを測る。327は羽口の小片である。被熱によって一部がガラス質化する。

SK46(Fig31)

調査区の東端で検出した。平面はやや不整形ではあるが、いわゆる方形竪穴状遺構と呼称される土坑である。西側隅には柱穴を有する。矢板沿いで検出し、他遺構に切られることから遺物には混入資料が多いが以下に図示した遺物の他に底部ヘラ切りを主体とする土師器の小片を確認しており12世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

328は瓦器碗である。比較的丁寧なつくりで、内外面のミガキも明確に残る。329は陶器壺の底部である。胎土は灰白色、釉は灰緑色を呈する。

SK48(Fig31)

SK46の北側に位置する方形竪穴状遺構である。両者は切り合い関係にあるものと考えられる。主軸はSK46に近い。出土遺物には以下の他に高台付の土師器环などが出土している。

330は玉縁口縁をもつ白磁壺の体部上半である。331は羽口である。被熱により部分的に変色する。

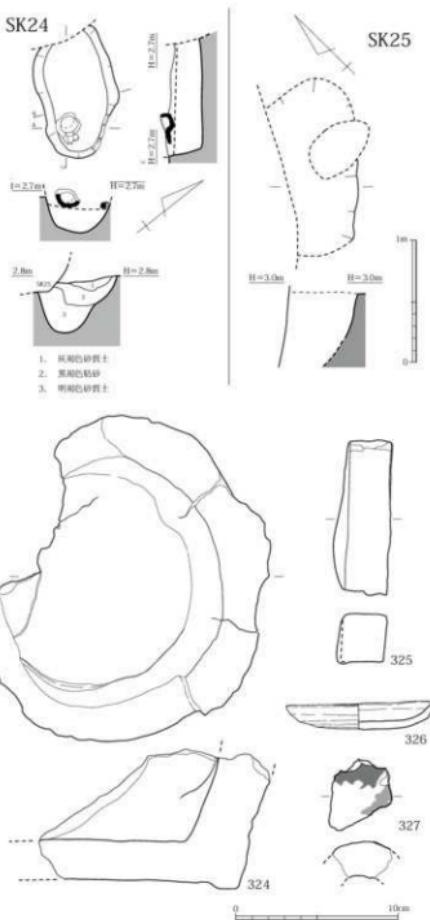


Fig30 SK24・25 実測図(1/40)
および出土遺物実測図(1/3)

SK64(Fig31)

調査区の中央やや南東側寄りで検出した。調査地点で唯一の古墳時代の遺構である。東側半分を捲乱によって切られ、平面の詳細は不明。断面は碗型を呈し、残存部で25cmを測る。図示したとおり、床面直上から小型丸底壺が出土した。以下の遺物から古墳時代中期前半～中頃の遺構と考えられる。

332は小型丸底壺である。いわゆる粗製品で外面にはハケ目が残る。口縁は短くやや外傾しながら立ち上がり、胸部最大径は口径を上回る。333は土師器高环である。環部の下半で強く屈曲し、外側に開きながら立ち上がる。器壁は摩耗が著しい。

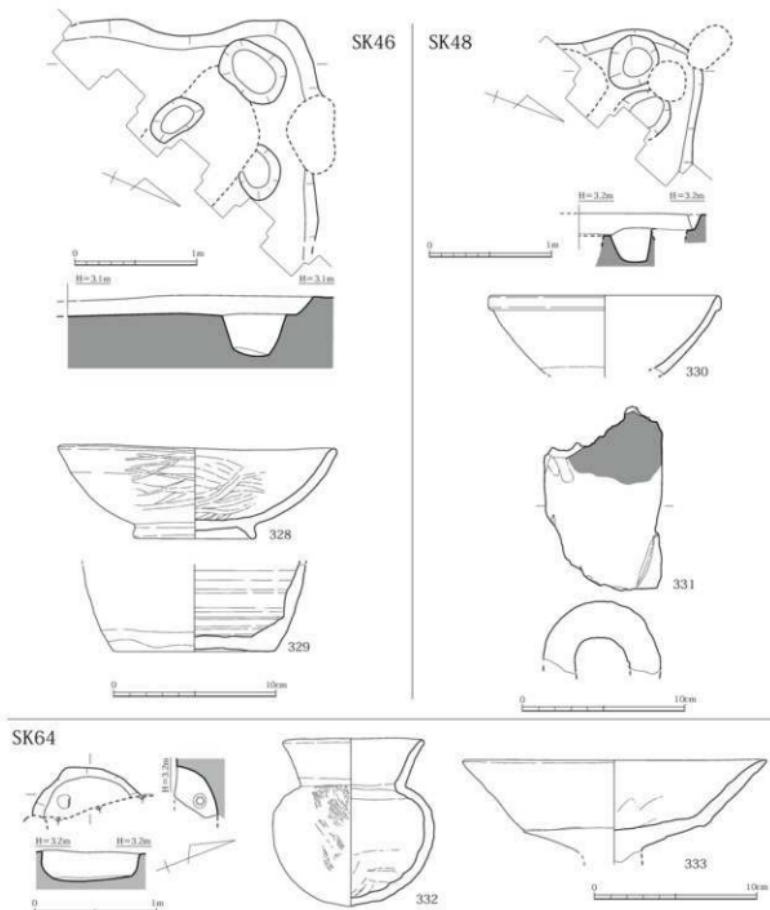


Fig31 SK46・48・64 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

包含層・遺構検出時・ピット出土遺物 (Fig32)

ここでは3面上包含層、および3面遺構検出時出土遺物、3面ピット出土遺物をまとめて報告する。334は白磁塊である。内面の釉を環状に掻き取るV型類である。体部を丁寧に打ち欠いたもので、外底面には墨書を施す。335は土師器の高台付碗である。外面とともに密なミガキが施され、外面の下半には規則的に指頭痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。336は土師器碗である。体部下半は稜を有するが丸みをもち、中位で内側に強く屈曲して口縁へと立ち上がる。337・338は黒色土器A類である。339は須恵器高杯の脚部である。340は須恵器杯身の口縁片。器壁は薄く口縁端部にはわずかに稜をもつ。341は土師器壺である。肩は張り、口縁はやや内傾しながら直に立ち上がる。外面はやや雑なハケ目、内面はケズリによって仕上げる。体部には穿孔を施す。342は土師器壺である。頸部は「く」の字を呈し、口縁は端部にむけて細くそぼまりながら立ち上がり、端部外側につまみ出す。343は土鉢である。

(4) その他の出土遺物

本調査地点で出土したその他の出土遺物として、石製品、金属製品、攪乱出土遺物をまとめて報告する。

石製品

本調査地点からは滑石製品を中心とした石製品が複数出土している。344は滑石製石鍋である。SK31から出土した。345は滑石製の温石か。平面はほぼ正方形を呈し、中心部に穿孔を施す。丁寧

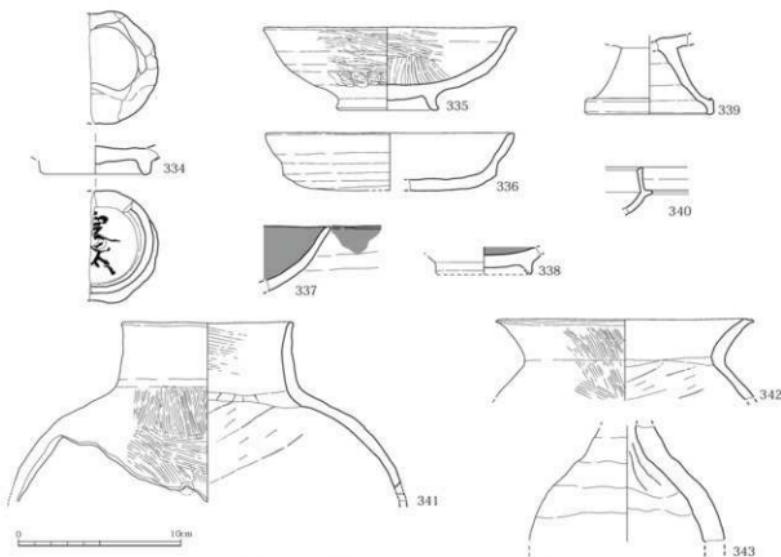


Fig32 3面遺構覆土・遺構検出時・ピット出土遺物実測図 (1/3)

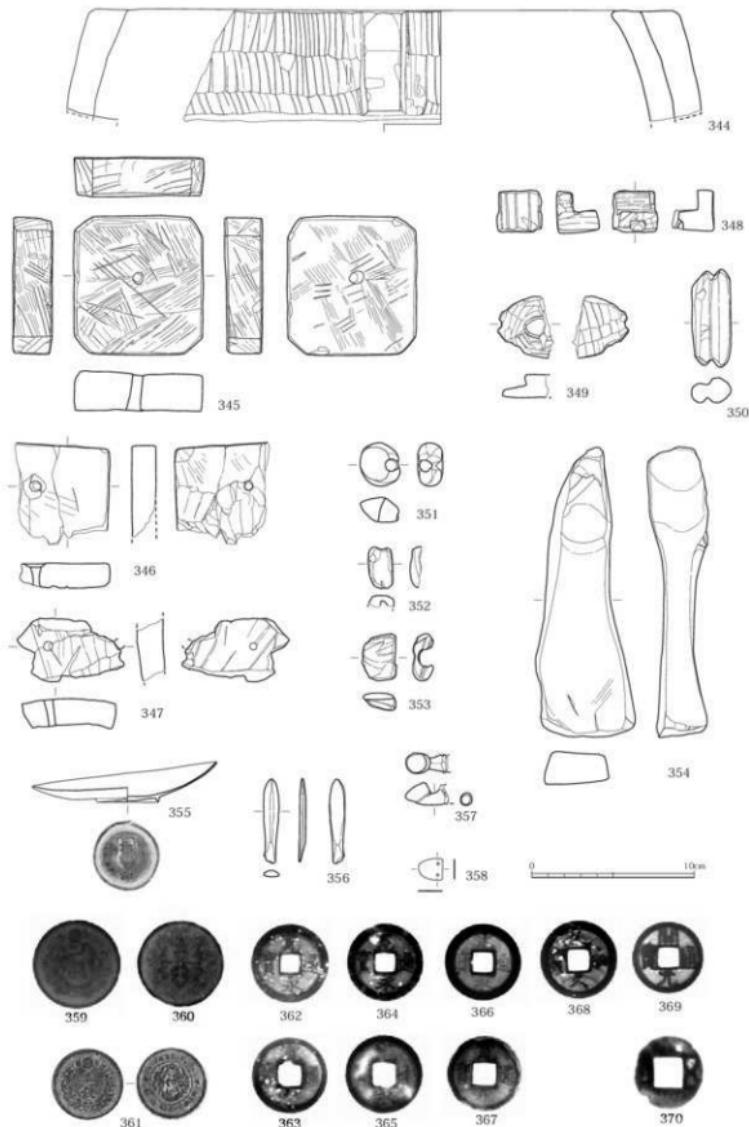


Fig33 出土石製品・金属製品実測図(1/3)および銅銭X線写真・拓本(縮尺任意)

なケンマで仕上げられており、四隅の面取りも丁寧である。石鍋などの転用品ではなく、専用として作られたものであろう。346・347 も温石か。347 は断面がわずかに湾曲する。石鍋の転用品であろう。348 は用途不明の滑石製品である。石鍋の転用品で、断面「く」の字状の形を呈する。349 は滑石製のバレン状石製品である。穿孔は確認できない。350 は滑石製の石錘である。351～353 も石錘か。いずれも穿孔を施す。354 は砂岩製の砥石である。

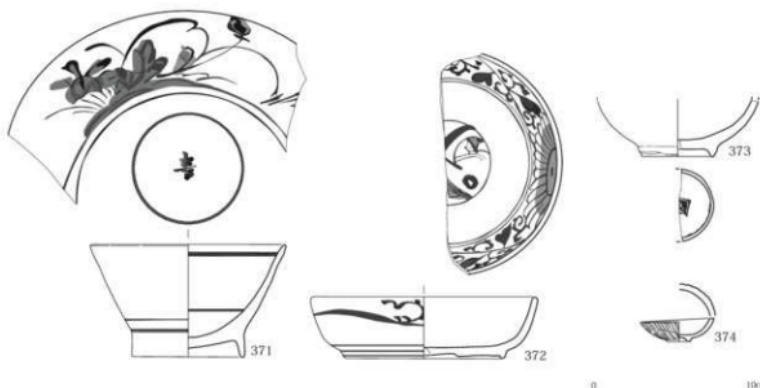
金属器

355 は青銅製の皿である。器形は大きくゆがむ。外底面には刺印が認められ、「長■印」と読める。356 は不明青銅製品である。357 は青銅製の雁首である。358 は小鉤である。359～370 は銅錢である。大半が近世以降のものである。359・360 は大正時代の銅錢である。359 は一銭、360 も一銭か。361 は明治時代の半銭である。明治七年と読める。362～367 は寛永通宝である。368 は文久永宝である。裏面に波形が刻まれる。369 は開元通宝である。370 は五銖銭である。これら以外にも、個別には取り上げていないが、用途不明の板状鉄製品が出土している他、各遺構からまとまつた量の鐵滓が出土している。

攪乱出土遺物

本調査地点で攪乱として扱ったものは 1 面および 1 面上整地層上から掘り込んだものであるが、時期は上記の銅錢が示す近世～近代の遺物が多く、SEO1 と同時期、もしくは近い時期と考えられる事から、近世～近代の「遺構」とするべきかもしれない。これらの攪乱のうち、遺物がまとまって出土しているものにはそれぞれ番号を付している。紙幅の都合上ここで全てを報告することはできないが、いずれまとめて報告して、その責を果たしたい。ここではそのごく一部を挙げておく。

371～373 は肥前系の磁器である。371 は染付碗である。江戸時代後期に主流となるいわゆる広東碗で、文様は線描きによって描かれる。372 は 371 とほぼ同時期の蛇ノ目凹形高台をもつ皿である。373 は青磁碗である。外底面には二十枚内に崩れた渦福の鉢款をもつ。374 は紅皿である。



III 小結

最後に第78次調査の成果について、特に注目すべき点を個別に取り上げつつ、既往の調査と比較しながらまとめたい。

遺構の消長

箱崎遺跡では、弥生時代後期前後に散発的にではあるが遺構が営まれるようになり、古墳時代以降に集落的な様相がより強くなる。当初の遺構は砂丘の発達の関係もあるだろうが、遺跡の東側緩斜面を積極的に利用したようで、南北方向に遺構群が展開する。既往の調査結果から、初頭以降に一斉に生活遺構が出現し、古墳時代前期を中心として集落が営まれるということが分かる。この遺構群の存続期間は短く、中期以降集落は徐々に衰退するようである。本調査地点で検出されたSK64は古墳時代集落末期の遺構であろう。混入資料としてやや時期が下る須恵器の小片が出土しているが、これに伴う遺構は検出されず今後の調査成果に期待したい。

遺跡では、古墳時代以降、数世紀にわたって場の利用が放棄され、再び遺構が出現するのは菅崎宮創建期の10世紀とされている。本調査地点で検出されたSK64以降の古い遺構はSK22・SK34・SK41である。これらは10世紀～11世紀前半に歸属し、遺跡全体からみた遺構の消長と符号する。また、これ以外にも調査地点の各遺構や包含層からは、黒色土器A類を典型とする該期の土器片が多数出土している。本時期の遺構は本調査地点も含む菅崎宮の南東部の比較的限定的な範囲で検出されており、はじめに述べた出土遺物から、一般的な集落とは異なる性格をもつと考えられる。

箱崎遺跡における遺構の増加は次代以降に著しく、11世紀後半～12世紀前半にかけて遺構が徐々に増加し、12世紀中頃～13世紀には遺跡内の全体に遺構が営まれるようになる。この遺構の爆発的な増加には、同時期に國際貿易都市として急成長する博多遺跡群の直接的な影響があることは出土遺物における陶磁器の割合からも明らかである。本調査地点における遺構のピークもまさにこの時期であり、検出した大半の遺構は本時期のものである。特に多いのは、土師器集積遺構である。

本調査地点で検出される中世期の最も新しい遺構は13世紀代まで、その後、遺構から人跡がうかがえるのは近世後半をまたなければならない。遺跡内では、中世後半の遺構の検出割合が前代に比して著しく減少することから、都市としての機能が消失したとされる傾向が強い。これに関しては、近年の調査の結果から、中世後半の集落の中心が、調査地点が少ない遺跡の北西側に移る可能性や、現地表下の極めて深い部分に本来残存していた中世後半の遺構が、近現代の掘り込みや削平によって失われている可能性が指摘されている。本調査地点についても、上記の理由を当てはめて考えることもできようが、後述する遺構・遺物の検出状況からそれらの理由とは全く異なる要因も考えられる。

検出遺構について

上記のとおり、本調査地点でも他の調査地点同様、11世紀後半以降に遺構が増加するが、周辺の調査地点とは遺構の分布が異なることが指摘できる。周辺では都市化に伴う人口の急増及び集落・屋敷地の継続を示すように、生活遺構の典型である井戸が著しく切り合った状態で検出されるが、本調査地点での井戸の検出は2基のみにとどまる。対して土師器の集積遺構は、規模の大小はあるものの12基を検出しており、周辺の調査地点と比較しても突出している。近接する12次調査などでは井戸が集中的に検出されていることから、単に場の利用の違いともとれるが、いずれにしても一帯の

特殊性は指摘できよう。最も古いものは、底部ヘラ切りの土師器のみ出土するSK34である。覆土中に焼土を含み、土師器の量も少なく、性格が異なる可能性はあるが同一の遺構として挙げている。次代のものとして底部ヘラ切りと糸切りの土師器が混在するSK10・SK31がある。これら以外の土師器集積遺構はいずれも底部糸切りの土師器のみで構成されるもので、法量から12世紀後半～13世紀に位置付けられる。本時期が土師器集積遺構の中心であるといえよう。

出土遺物について

土師器集積遺構が多いことから、必然的に出土遺物における土師器の割合は非常に高くなるが、注目すべきは、その他の遺構や包含層出土遺物なども含めた出土遺物全体からみても土師器の割合が非常に高いことである。箱崎遺跡の中心時期と考えられる11世紀後半～13世紀は、「白磁の時代」、「青磁の時代」と形容されるように、周辺調査地点においては遺構の時期比定にあたり陶磁器を基準にできるほどの量の輸入陶磁器が出土しているが、本調査地点ではそれが困難なほど少ない。対して、目立つのは楠葉型瓦器碗を典型とする畿内産の瓦器碗で、出土量は既往の調査の中で最多である。このうち、楠葉型瓦器碗と判断したものは、周辺や博多遺跡群同様Ⅰ期・Ⅱ期の範疇におさまるものと考えられ、宮崎宮が石清水八幡宮の別宮になった時期と重なり、そうした歴史的事象を反映したものだろう。Fig36は箱崎遺跡における畿内産土器の分布を記した図である。これをみると、78次調査付近では楠葉型瓦器碗が集中的に出土していることが分かる。以上から、78次調査地点付近は宮崎宮に極めて関係が深い地点であったことが推察され、次代に増加する土師器集積遺構もこのような状況の中を考えると興味深い。

また、その後中世後半以降の遺構が全く検出されないことにについても、宮崎宮との関連で考えられる可能性がある。本調査地点の西側約150m前後の宮崎宮の北側隣接地では、中世に遡る遺構が全く確認されない部分があるが、この理由としては宮崎宮創建以来、長らく宮城内であった可能性が考えられる。つまり、中世後半以降、単に一帯の土地利用が放棄されたわけではなく、宮城内に取り込まれた結果、明確な遺構が確認できないという結果になっているのだろう。

以上、本調査の成果を簡単にまとめたが、その他、生産関連遺物など言及すべき点は数多くあり、これについては今後の課題としたい。

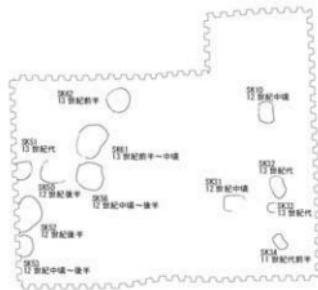


Fig35 土師器集積遺構配置図 (1/300)

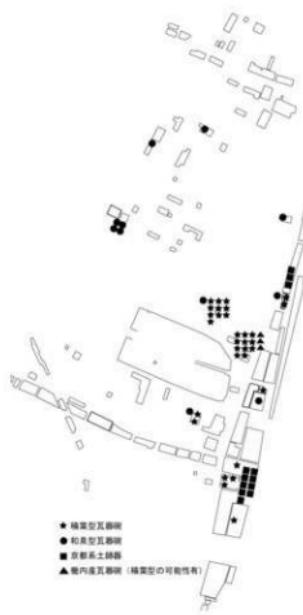


Fig36 畿内産土器の分布 (1/10,000)

PL1



1 調査第1区1面全景（南東から）



2 調査第1区2面全景（南東から）



3 調査第1区3面全景（南東から）



1 調査第2区2面全景（北西から）



2 調査第2区3面全景（北西から）



3 調査第3区2面全景（北西から）



4 調査第3区3面全景（北西から）

PL3



1 面上整地層（道路状遺構）検出時（西から）



2 SD02（道路側溝）（西から）



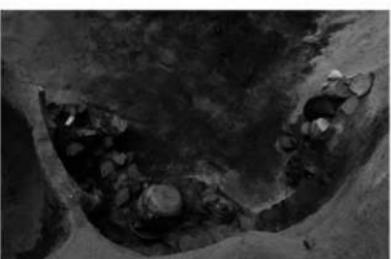
3 SK03・04 土層断面（南東から）



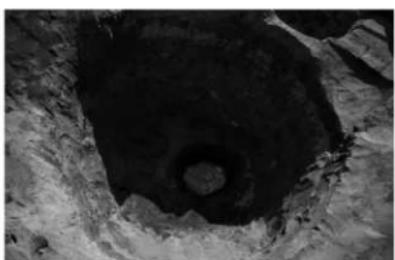
4 SK31 遺物出土状況（北から）



5 SK33 遺物出土状況（北東から）



6 SK50 遺物出土状況（南から）



7 SE65 完掘状況（南西から）



8 SK64 遺物出土状況（北東から）



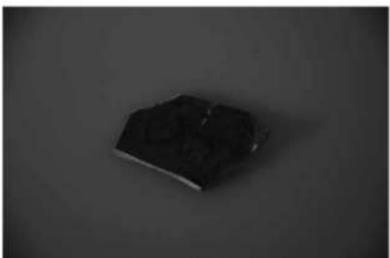
1 SK10 出土遺物 (47)



2 SK10 出土遺物 (65)



3 SK14 出土遺物 (71)



4 SK32 出土遺物 (111)



5 SK22 出土遺物 (318)



6 SK24 出土遺物 (324)



7 SK64 出土遺物 (332)



8 摻亂出土遺物 (372)

報告書抄録

ふりがな	はこざき56							
書名	箱崎56							
副書名	箱崎遺跡第78次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1346集							
編著者名	中尾祐太							
編集期間	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	平成30年3月26日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はこざき56 箱崎遺跡第78次	福岡市東区箱崎1丁目 2032-2	40131	2639	33.61.48	130.42.48	2016.1.25 ～ 2016.5.24	270	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
箱崎遺跡	集落跡	中世	土坑、井戸、柱穴	陶磁器、土師器、瓦器、生産関連遺物(羽口等)				
要約	対象地は箱崎遺跡の南東部に位置し、遺跡の展開に大きな影響を与えた筥崎宮に近接する。周辺では古墳時代以降の遺構が検出されているが、本調査地点でも古墳時代の遺構の他、筥崎宮創建期前後に比定される遺物を多数検出している。							
	遺跡の中心は12世紀～13世紀で、本調査地点でも本時期に属する遺構が最も多いが、井戸に代表される生活遺構より、むしろ非日常的な土師器の集積遺構が目立つ。また、11世紀後半以降の楠葉型瓦器が多数出土しており、これらの遺構・遺物および上記の立地から、一帯は一般集落とは異なり、筥崎宮関連の場であったと推定される。							
遺物には土師器や瓦器、陶磁器の他、輪の羽口や鉢形状の土製品が出土している。ここからも特殊な状況がうかがえよう。								

箱崎 56

箱崎遺跡第 78 次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1346 集

2018 年 (平成 30 年)3 月 26 日

発行 福岡市教育委員

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1

印刷 みやざき印刷

福岡市早良区相原 14-19